

別添 1

厚生労働科学研究費補助金

障害者政策総合研究事業

強度行動障害者支援に関する効果的な情報収集と
関係者による情報共有、支援効果の評価方法の
開発のための研究

令和3年度 総括・分担研究報告書

研究代表者 日詰 正文

令和4（2022）年5月

目 次

I. 総括研究報告

強度行動障害者支援に関する効果的な情報収集と関係者による情報共有、
支援効果の評価方法の開発のための研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

主任研究者 日 詰 正 文

II. 分担研究報告

1. ICF および ICT を活用した PDCA サイクル支援パッケージの効果検証のための社
会実装研究 ―強度行動障害者を支援する事業所における試行調査（一次調査）
―・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

主任研究者 日 詰 正 文

分担研究者 安 達 潤、井 上 雅 彦

研究協力者 岡 田 裕 樹、内 山 聡 至、高 橋 理 恵

2. ICF および ICT を活用した PDCA サイクル支援パッケージの効果検証のための社
会実装研究―強度行動障害者を支援する事業所における試行調査および実践検
討・意見交換会の実施（二次調査）―・・・・・・・・・・・・・・・・・・22

主任研究者 日 詰 正 文

分担研究者 安 達 潤、井 上 雅 彦

研究協力者 岡 田 裕 樹、内 山 聡 至、高 橋 理 恵

III. 研究成果の刊行に関する一覧表

IV. 資料

別添3

強度行動障害者支援に関する効果的な情報収集と
関係者による情報共有、支援効果の評価方法の
開発のための研究

総括研究報告書

令和3年度厚生労働科学研究費補助金
 (障害者政策総合研究事業(身体・知的等障害分野))
 (総括・分担) 研究報告書

研究課題名(課題番号) : 強度行動障害者支援に関する効果的な情報収集と関係者による情報共有、支援効果の評価方法の開発のための研究(20GC1005)

主任研究者 : 日詰 正文 (国立重度知的障害者総合施設のぞみの園研究部部長)

【研究要旨】

強度行動障害者支援における課題は、「問題となっている行動の背景要因を見つけることが難しいこと」、「支援のポイントの絞り込みや変化の分析をチームで計画、モニタリングする仕組みがなく、一部の支援者や事業所に負担が集中すること」の2点である。

この2つの課題の解決には、「特殊な一部の情報ではなく、対象者の生活全体をいったん網羅的に把握した上で、チームで背景要因を探ること」、「記録の共有と、迅速な分析をチームで行うこと」を念頭に置いた仕組みが必要になる。

本研究は、この2点について、全国の支援現場での実装につながるモデルを開発するために、令和2(2020)年度の研究では「ICF(国際生活機能分類)」「ICT(情報通信技術)」の活用が効果的であり、これらを活用した強度行動障害 PDCA サイクル支援パッケージ(以下、PDCA 支援パッケージ)の開発が必要であることを把握した。

2年目である令和3年(2021)度は、PDCA 支援パッケージを実際の支援現場での試行(一次調査)、PDCA 支援パッケージの効果や課題の分析を行うために「実践検討・意見交換会」(二次調査)を実施した。

一次調査、二次調査の結果より、本研究で提唱する PDCA 支援パッケージは、「強度行動障害者の全体的な理解と情報の整理」、「効率的な記録と分析」、「支援計画の作成と見直し」などに効果があることが明確になった。

分担研究者			
安達 潤	北海道大学大学院教育学研究 院・教授	大黒哲史	大阪府立砂川厚生福祉センタ ー
井上雅彦	鳥取大学医学系研究科臨床心 理学講座・教授	竹矢 恒	社会福祉法人同愛会 日の出 福祉園・副事業所長
	研究協力者	高橋亜希子	株式会社エンカレッジ・取締 役
市川宏伸	日本発達障害ネットワーク・ 理事長	今出大輔	社会福祉法人旭川荘 おかや ま発達障害者支援センター
松上利男	全日本自閉症支援者協会/社 会福祉法人北摂杉の子会・理 事長	中谷啓太	鳥取大学附属病院 子どもの 心の診療拠点病院推進室
志賀利一	全日本自閉症支援者協会/横 浜やまびこの里 相談支援事 業部・部長	成田秀幸	国立重度知的障害者総合施設 のぞみの園診療部・部長
會田千重	独立行政法人国立病院機構 肥前精神医療センター・療育 指導科長	伊豆山澄男	国立重度知的障害者総合施設 のぞみの園生活支援部
		村岡美幸	国立重度知的障害者総合施設 のぞみの園研究部研究係
		高橋理恵	国立重度知的障害者総合施設

熊岡正悟	のぞみの園研究部研究係 国立重度知的障害者総合施設 のぞみの園研究部研究員
内山聡至	国立重度知的障害者総合施設 のぞみの園研究部研究係
岡田裕樹	国立重度知的障害者総合施設 のぞみの園研究部研究員

A. 研究目的

本研究の目的は、見えにくい個々の障害特性を理解し、適切な環境調整を行うことが支援原則とされる強度行動障害者支援の現場において課題となっている支援対象者の全体像の理解や、効果的、効率的な情報収集と情報共有について研究を行い、ICF（国際生活機能分類）やICT（情報通信技術）などを含めた支援現場で活用できるPDCAサイクルを示すことである。

具体的には、①ICFを用いて、支援対象者の全体像を理解する、②解決につながる、当事者自身のニーズ、活用できる特性やニーズを「冰山モデル」の様式で整理し支援の焦点を明確にする、③情報収集の労力負担の解消や客観的データ収集を目的としたICTの活用、④支援チームによる支援結果の分析と支援計画の修正を行う、といったプロセスである。

国立のぞみの園では、令和2（2020）年度の研究において、ICFやICTを活用し、効果的な利用者情報の把握や記録の収集・分析・共有を行うためのPDCA支援パッケージを開発した。このPDCA支援パッケージを支援現場で活用していくために、効果の検証のための社会実装研究が必要となっていた。

2年目である令和3年（2021）度は、以下の2つの調査・研究を行った。

- ① PDCA支援パッケージを実際の支援現場で試行するとともに、効果や課題を収集し、PDCA支援パッケージの実用化に向けた資料とすることを目的として、強度行動障害者支援に取り組んでいる事業所14カ所を対象とした試行調査を一次調査として実施した。
- ② 一次調査の結果より、「目に見えにくい障害特性や強み、環境要因等の包括的な情報収集」や「収集した記録の分析と関係者間での情報共有」などについて改善が期待できる

ツールとしてPDCA支援パッケージが有用であることが確認できたが、調査の対象が限定的であり、また支援パッケージに関する課題も明らかになったことから、二次調査として、一次調査の結果を踏まえて改善したPDCA支援パッケージのさらなる試行と効果や課題の収集を行うことを目的とした「実践検討・意見交換会（以下、意見交換会）」を実施し、参加した事業所29カ所を対象とした試行調査を実施することによって広く意見を収集した。

B. 研究方法

令和3（2021）年度の調査概要は以下の通りである。

1) ICFおよびICTを活用したPDCAサイクル支援パッケージの効果検証のための社会実装研究—強度行動障害者を支援する事業所における試行調査（一次調査）—

■調査対象：強度行動障害者支援に取り組んでいる事業所14カ所（本研究の研究協力者の所属する事業所および推薦のあった事業所から選定）とした。調査対象事業所の事業種別は、施設入所支援5カ所、共同生活援助3カ所、生活介護4カ所、就労継続支援B型1カ所、医療機関（精神科病棟）1カ所であった。

■調査内容：

（1）PDCA支援パッケージの試行

各事業所で対象となる利用者を選定し、PDCA支援パッケージを使って情報の整理、行動の記録、支援手順書の作成と見直しを繰り返し行った。

本調査では、ICFのツールとして、「ICF情報把握・共有システム」、ICTのツールとして、「Observations」を使用した。

■PDCA 支援パッケージについて

- ・一次調査における支援パッケージは、表1のプロセスをPDCAサイクルで行うものとした。

表1 支援パッケージ試行の流れ（一次調査）

<p>① ICF システムへ記入し全体像の把握</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ICF 情報把握・共有システム（以下、ICF システム）の「情報把握シート」に対象となる利用者の情報を記入する。 ・ 「情報把握シート分析アプリ」を使い内容を整理する。 <p>② 利用者の担当者が行動記録表を記入し、課題となる行動を選定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Observations Sheet を使用し、対象となる利用者の行動を記録する。 <p>③ 利用者の担当者が課題となる行動のベースラインを記録</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Observations2 を使用し、対象となる利用者の行動の頻度や時間帯を記録し、行動の傾向を確認する。 <p>④ 利用者の担当者が氷山モデルシートまたはストラテジーシートを作成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 氷山モデルシート等を使用し、課題となっている行動の背景要因を分析する。 <p>⑤ 利用者の担当者が支援手順書を作成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ①～④の内容を踏まえて支援手順書を作成する。 <p>⑥ 利用者の担当者等が支援の実施および行動の記録</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Observations2 を使用し、⑤で作成した支援手順書を基に支援を行い、対象となる利用者の行動の頻度や時間帯を記録する。 <p>⑦ 記録の分析</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Observations の分析用ホームページを使用し、記録データの分析を行う。 <p>⑧ ICF システムへ記入し、支援前後の全体像の把握</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 記録の分析を踏まえて、①で記入した ICF システムを見直し、支援前後の全体像を比較する。必要に応じて加筆修正を行う。 <p>⑨ 支援手順書の修正</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 支援手順書の内容を見直し、必要に応じて修正する。

(2) 試行後のアンケート調査

試行調査を行った事業所の支援者を対象に、PDCA 支援パッケージについての評価点（5 件法）と、効果や課題等の意見収集を行うためのアンケート調査を行った。

調査内容は表2の通り。

表2 アンケート調査の内容

<p>Q1. 利用者の障害特性や強み、環境要因等の把握・整理が行いやすくなったかどうかについて教えてください</p> <p>Q2. 支援課題が焦点化され、支援計画が具体的になったかどうかについて教えてください</p> <p>Q3. 支援者が支援に必要な利用者情報や記録の収集が行いやすくなったかどうかについて教えてください</p> <p>Q4. 関係者間での利用者情報や支援に関する情報共有が行いやすくなったかどうかについて教えてください</p> <p>Q5. 記録に係る負担感の軽減が図れたかどうかについて教えてください</p> <p>Q6. 支援に必要な利用者情報および記録等の分析がしやすくなったかどうかについて教えてください</p> <p>Q7. 試行調査で実施した本パッケージ全体に関する評価について教えてください</p> <p>Q8. 本パッケージの改善点等があれば教えてください (例：実施手順、使用ツール等)</p>
--

■調査期間：令和3（2021）年5月24日から7月31日

（倫理面への配慮）

調査の手続きについては、国立のぞみの園調査研究倫理審査委員会で承認を得た。

2) ICF および ICT を活用した PDCA サイクル支援パッケージの効果検証のための社会実装研究—強度行動障害者を支援する事業所における試行調査および実践検討・意見交換会の実施（二次調査）—

1. 意見交換会の実施

■開催方法：オンライン

■開催日：全3回とした

- ・ 第1回 令和3（2021）年10月29日
- ・ 第2回 令和3（2021）年11月29日
- ・ 第3回 令和4（2022）年1月13日

■募集人数：32名

■参加要件：以下の要件を提示の上、募集した。

- ・ 国立のぞみの園が開催する強度行動障害支援者養成研修（実践研修（指導者研修））修了者または修了者の推薦を受けた者
- ・ 全3回連続して出席できる者
- ・ 自閉症を中心とする強度行動障害がある方の直接支援を行っており、事業所長の推薦を受けた者
- ・ スマートフォン、タブレットのアプリを用いた記録が可能なる者

2. 試行調査

■調査対象：意見交換会に参加した強度行動障害者支援に取り組んでいる事業所 29カ所とした。

■調査内容：

(1) PDCA 支援パッケージの試行

対象利用者を選定し、PDCA 支援パッケージに沿って、情報の整理、行動の記録、支援手順書の作成と見直しを繰り返し行った。

本調査では、ICF のツールとして、「ICF 情報把握・共有システム」、ICT のツールとして、「Observations」（スマートフォンのアプリ）を使用した。

(2) 試行後のアンケート調査

試行調査を行った事業所の支援者を対象に、PDCA 支援パッケージについての評価点（5件法）と、効果や課題等の意見収集を行うためのアンケート調査を行った。調査内容は、一次調査と同じ内容とした。

■調査期間：令和3（2021）年10月29日から1月31日

（倫理面への配慮）

調査の手続きについては、国立のぞみの園調査研究倫理審査委員会で承認を得た。

■一次調査を受けた支援パッケージに関する変更点

一次調査の結果より、課題点として下記があげられた。

【PDCA 支援パッケージの進め方】

・ ICF システムの記入完了期限および、氷山モデルシート作成後から支援手順書の作成までの期間がかなりタイトで、調査期間内に終えるために、支援会議等の時間をしっかりとって考えることができなかった

【PDCA 支援パッケージの内容】

- ・ ICF システムの内容が難しく理解するのに時間がかかる上、情報入力に労力が必要
- ・ 事業所により ICT の環境整備が不十分なことや操作が不慣れなこと
- ・ 行動の背景要因を捉える上では支援者のスキルが必要

- ・ 上記の課題を踏まえ、二次調査となる本調査では、以下の点を改善した。
- ・ 試行期間を約1ヶ月延ばし、約3ヶ月とした
- ・ ICF システムの入力や ICT の操作等の質問に速やかに対応するため、参加者との円滑な情報共有を図った。具体的には、ビジネスチャットサービスの「chatwork」を活用した
- ・ 各回でグループごとの進捗確認に加え、各回の間にも進捗確認の機会を細かく設

表3 支援パッケージ試行の流れ（二次調査）

- ① ICF システムへ記入し全体像の把握
 - ・ ICF 情報把握・共有システム（以下、ICF システム）の「情報把握シート」に対象となる利用者の情報を記入する。
 - ・ 「情報把握シート分析アプリ」を使い内容を整理する。
- ② 利用者の担当者が行動記録表を記入し、課題となる行動を選定
 - ・ アプリ「Observations Sheet」を使用し、対象となる利用者の行動を記録する。
- ③ 記録の確認
 - ・ アプリの記録を PC に送る。
 - ・ Observations 分析用ホームページにデータをアップロードし、データを確認する。
- ④ 利用者の担当者が課題となる行動のペースラインを記録
 - ・ アプリ「Observations2」を使用し、対象となる利用者の行動の頻度や時間帯を記録する。
 - ・ 行動の記録を積み重ねる。
- ⑤ 記録の確認
 - ・ アプリの記録を PC に送る。
 - ・ Observations 分析用ホームページにデータをアップロードし、データを確認する。
- ⑥ 支援会議を実施し、氷山モデルシートで行動の背景を整理する
 - ・ 氷山モデルシートを使用し、課題となっている行動の背景要因を分析する。
- ⑦ 支援手順書の作成
 - ・ ①～⑥の内容を踏まえて支援手順書を作成する。
- ⑧ 支援の実施および行動の記録
 - ・ アプリ「Observations2」を使用し、⑦で作成した支援手順書を基に支援を行い、対象となる利用者の行動の頻度や時間帯を記録する。
- ⑨ 記録の確認
 - ・ アプリの記録を PC に送る。
 - ・ Observations 分析用ホームページにデータをアップロードし、データを確認する。
- ⑩ ICF システムへ記入し、支援前後の全体像の把握
 - ・ 記録の分析を踏まえて、①で記入した ICF システムを見直し、支援前後の全体像を比較する。必要に応じて加筆修正を行う。
- ⑪ 支援手順書の修正
 - ・ 支援手順書の内容を見直し、必要に応じて修正する。

- 定した
- ・第2回に ICF 試行途中での質疑応答等のフォローアップの時間を設定した
 - ・PDCA 支援パッケージのプロセスに、「支援会議の実施」を明示した（対象者の特性や行動記録の共有、冰山モデルへの落とし込みを踏まえた背景要因を把握する作業をチームで行うため）
- 以上を踏まえて、PDCA 支援パッケージは、表3のプロセスを PDCA サイクルで行うものとした。

C. 研究結果

1) ICF および ICT を活用した PDCA サイクル支援パッケージの効果検証のための社会実装研究—強度行動障害者を支援する事業所における試行調査（一次調査）—：

1. 調査結果

調査対象のうち14カ所、19名から回答を得た。質問ごとの回答は以下の通りである。

Q1. 利用者の障害特性や強み、環境要因等の把握・整理が行いやすくなったかどうかについて教えてください

評価点

- ・「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答は16名で、全体の84.2%であった。

効果

- ・利用者の障害特性、強みの把握と整理が行いやすくなった
- ・ICFによって環境要因も含めた利用者の理解が進み、支援の組み立てがしやすくなった
- ・ICFによって既に把握していた情報の整理や、行ってきた支援の振り返りができた

課題

- ・ICFの設問が利用者の状況・状態に合わないものがあった

Q2. 支援課題が焦点化され、支援計画が具体的に became かどうかについて教えてください

評価点

- ・「効果的であった」と「少し効果的であっ

た」の回答は13名で、全体の68.4%であった。

効果

- ・支援課題が明確となり、焦点が絞りやすくなった
- ・課題や変化が整理され、具体的な支援計画の作成につながった

課題

- ・本人のニーズや意思をしっかりと把握しておく必要がある

Q3. 支援者が支援に必要な利用者情報や記録の収集が行いやすくなったかどうかについて教えてください

評価点

- ・「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答は15名で、全体の78.9%であった。

効果

- ・ICTによって記録が簡素化され短時間で取ることができた
- ・スマホのアプリ（Observations）によって支援をしながらリアルタイムで正確に記録を取ることができた

課題

- ・ICTの使用についての理解が十分でなく手間がかかった

Q4. 関係者間での利用者情報や支援に関する情報共有が行いやすくなったかどうかについて教えてください

評価点

- ・「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答は12名で、全体の63.2%であった。

効果

- ・ICFによる情報やICTによる記録によって情報が視覚的にわかりやすく確認できるため、支援者間で共有がしやすくなった
- ・利用者の行動が記録によって整理されたため、支援の優先順位がつけやすくなった

課題

- ・家族や他機関と行動観察に対するアプローチや考え方に違いがある場合は、同じツールで記録を取ることが難しい

Q5. 記録に係る負担感の軽減が図れたかどうかについて教えてください

評価点

- ・「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答は16名で、全体の84.2%であった。

効果

- ・スマホのアプリ (Observations) の入力が簡単で短時間でできるため、記録の負担の軽減につながった

課題

- ・支援中に記録を入力することが難しい場合がある

Q6. 支援に必要な利用者情報および記録等の分析がしやすくなったかどうかについて教えてください

評価点

- ・「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答は15名で、全体の78.9%であった。

効果

- ・情報が整理されるため課題を絞りやすく、支援の計画を立てやすくなった
- ・記録がグラフ化されて視覚的にわかりやすくなるため記録の分析がしやすくなった

課題

- ・記録は効率的に取ることができたが、分析は支援者のスキルが求められる

Q7. 試行調査で実施した本パッケージ全体に関する評価について教えてください

評価点

- ・「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答は16名で、全体の84.2%であった。

効果

- ・ICF、ICT を活用することで情報の収集と共有がしやすくなり、課題が見えやすくなった
- ・短時間で効率的に記録を取ることができ、負担の軽減につながった
- ・PDCA サイクルを行うことで支援の見直し

が可能となり、支援者間で更新をしていくことの必要性を確認することができた

課題

- ・ICF は効果的であるが、情報を入力する上で労力がかかる
- ・ICT に不慣れであることや、Observations のクラウド化や操作に関する課題がある

Q8. 本パッケージの改善点等があれば教えてください (例: 実施手順、使用ツール等)

ICF について

- ・ICF 情報把握シートの記載は項目が多く、また現在の生活を見ているだけでは記載できない箇所も多々見られた。
- ・教育・医療・福祉の連携が重要になってくるが、利用者本人が生活場所を移行する際の資料の一つとしてICFシートのデータを活用することで、受ける事業所側の初期負担の軽減につながるとともに、本人への支援がスムーズに行われるのではないかと。
- ・ICF は幼少期から記録がつながり続けることで、より適切な分析ができるのではないかと。

ICT (Observations) について

- ・Observations Sheet に関して、分析 HP を開かないと記録の一覧が見られないことは少し負担感があり、アプリからも直接一覧が見られることが望ましい。
- ・行動記録の入力方法 (書き方・表現) について例示があると入力方法が統一でき分析しやすくなるように感じた。
- ・Observations は、記録の合理化や共有・分析で利用できる可能性は感じたが、使い方の周知、それぞれの現場での使い方には工夫が必要と思われた。
- ・クラウド上でデータが保存、共有できれば便利である。
- ・将来的には冰山モデルや支援の手順書作成と連動して落とし込めるようにできればよい。

PDCA 支援パッケージについて

- ・冰山モデルシートも記入用紙だけではなく

く、記入することで支援方法の提案や関連性が考えられる項目の候補が出てくるツールやアプリになれば、支援者による技量や考え方による差は少なくなると感じた。

- ・ ICF システムの記入完了までと、冰山モデルシート作成後に支援手順書を作成の期間がかなりタイトで、支援会議等の時間をしっかりとって考えることができなかった。
- ・ 課題となる行動の選定とリストアップにより、本人の行動観察がより明確になる一方で、回数や頻度に現れてこない課題に関しては、支援者側の関わりや環境について平時の記録も併せて残しておく必要性を感じた。
- ・ 家庭での様子の記録、違いを分析できたらいと感じた。
- ・ 冰山モデルの記載が、今回のツールとの連動をあまり感じ取れない。

2) ICF および ICT を活用した PDCA サイクル支援パッケージの効果検証のための社会実装研究—強度行動障害者を支援する事業所における試行調査および実践検討・意見交換会の実施（二次調査）—

意見交換会の概要および試行調査の結果は以下の通りである。

1. 意見交換会について

(1) 応募人数：52 名（30 都道府県より応募あり）

(2) 参加人数：32 名（オブザーバー参加 13 名）

- ・ 参加者の選定にあたっては、各都道府県から 1 名以上の参加とし、重複した都道府県については事業所種別に偏りがでないようにした
- ・ 選定されなかった者については、オブザーバー参加とした
- ・ 参加決定から第 1 回目までに 3 名キャンセルがあり、第 1 回目は 29 名で実施した
- ・ 第 2 回目から 3 名欠席があり、第 2 回目以降は 26 名で実施した

(3) 参加者の属性

①階級：管理職級が 12 名、主任支援員級が 8 名、支援員級が 9 名であった。

②強度行動障害者支援の経験年数：「10 年以上」が 16 名、「1～3 年」が 5 名、「7～9 年」「4～6 年」が各 4 名であった。

③所属する事業所の種別：「施設入所支援」が 12 名、「生活介護」が 9 名、「行動援護」「放課後等デイサービス」が各 3 名、「共同生活援助」が 2 名であった。

2. 調査結果

調査対象となった意見交換会の最終的な参加者 26 名のうち、25 名から回答を得た。質問ごとの回答は以下の通りである。

Q1. 利用者の障害特性や強み、環境要因等の把握・整理が行いやすくなったかどうかについて教えてください

評価点

- ・ 「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答は 23 名で、全体の 92.0%であった。

効果

- ・ 特性や強み、環境要因に関する多くの項目が網羅されていたため、漏れなく情報を整理し把握することができた
- ・ 利用者の強みや苦手な部分を分析するのに今までなかった視点で考えることができた

課題

- ・ ICF システムで問われる内容の理解が難しいため、簡略化されたものがあるとよい

Q2. 支援課題が焦点化され、支援計画が具体的になったかどうかについて教えてください

評価点

- ・ 「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答は 17 名で、全体の 68.0%であった。

効果

- ・ ICF システムを参考に冰山モデルシートで支援課題を整理し視覚化したことで、支援計画や支援手順書のどこを変えるべきか見えるようになった
- ・ 課題や状況が一目でわかるため、支援計

画に反映する際にも効率的であった

課題

- ・ 焦点化された課題をどのように支援に結びつけていくかについてサポートが必要である

Q3. 支援者が支援に必要な利用者情報や記録の収集が行いやすくなったかどうかについて教えてください

評価点

- ・ 「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答は19名で、全体の76.0%であった。

効果

- ・ 利用者に関する必要な情報を集めるという点で非常に効果的であった
- ・ 視覚化のしやすさや現場で記録を取れる点で効果的であった
- ・ ICTを活用することで手軽に入力ができ、記録の精度が上がった

課題

- ・ ICTを使用した記録に対して、支援者によって慣れや得意不得意がある

Q4. 関係者間での利用者情報や支援に関する情報共有が行いやすくなったかどうかについて教えてください

評価点

- ・ 「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答は13名で、全体の52.0%であった。

効果

- ・ 利用者の状況がデータ化されることで保護者や医師、栄養士など他職種との情報共有が行いやすくなった
- ・ ICTツールを使うことで記録の取り方が標準化され、記録の分析結果がグラフによって視覚化されるので理解しやすかった

課題

- ・ 調査期間で他機関と情報共有する機会がなかった

Q5. 記録に係る負担感の軽減が図れたかどうかについて教えてください

評価点

- ・ 「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答は12名で、全体の48.0%であった。

効果

- ・ ICTを活用することで記録にかかる負担感の軽減に一定の効果はあった

課題

- ・ ICFシステムの記録は項目数の多さや内容の難しさがあり、通常業務に加えて取り組む場合は負担感がある
- ・ ICTツール(Observations)の記録を手軽にネット上で共有できればよい

Q6. 支援に必要な利用者情報および記録等の分析がしやすくなったかどうかについて教えてください

評価点

- ・ 「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答は18名で、全体の72.0%であった。

効果

- ・ 入力した記録が自動的にグラフ化されることで、利便性が高く分析もしやすくなった
- ・ ICFシステムは強みや支援の継続、修正などに分析できるため、どの部分にスポットをあてて考えればよいか分かりやすかった

課題

- ・ 行動の生起率などはわかりやすくなるが行動に対する前後の様子がわからない

Q7. 試行調査で実施した本パッケージ全体に関する評価について教えてください

評価点

- ・ 「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答は19名で、全体の76.0%であった。

効果

- ・ ICFシステムは、障害特性や環境要因の把握に効果的であった
- ・ ICTツールは、記録と分析に効果的であった
- ・ 利用者のおかれている環境や生活の質を

考える、という ICF の視点に沿うことで支援の改善が望める

- ・パッケージを事業所内で標準化できれば情報の更新や共有、支援会議など様々な点で活用できる

課題

- ・3ヶ月間の試行では不十分であった
- ・このパッケージを全国的に広める場合は使いやすい手軽さがなければ普及にはつながらない

Q8. 本パッケージの改善点等があれば教えてください(例:実施手順、使用ツール等)

ICF について

- ・ICF からどのように支援手順書につなげていくかについて享受する時間(講義や研修)が必要ではないか
- ・ICF シートは、項目数が多く、文字が小さくなり見にくさがあり、特に年配の支援員になると見る気がなくなってしまう
- ・効果の判断基準で支援員間の差が出やすいと感じたため、目安となる基準があるとうい
- ・パッケージの実実施手順で、ICF シートを支援会議でどう活用すればよいかがあると進めやすかった

ICT (Observations) について

- ・Observations を同一のアプリ内で分析結果が見られるとうい。
- ・回答分析やデータを Observations のスマホアプリから一度 PC に送るなどが手間なため、手順や操作がもう少し簡素化されるとよい
- ・事業所のタブレットでは Observations の分析ができなかった
- ・Observations のデータは、HP で読み込んで分析するのではなくそのまま分析結果が出せるとよい。
- ・Observations 2 の分析結果について、縦軸、横軸がもう少し細かく表示されるとよい。
- ・Observations2 のデータは、日付を指定して分析できるとよい。

パッケージについて

- ・活用する現場が ICT に慣れていない状態像を想定してのツールやアプリの使用が必要ではないか
- ・機器の使用方法のレクチャーについてもパッケージ内に含めてはどうか
- ・支援パッケージの紹介文をもう少しわかりやすくしたほうがよい(図も交える等)。せっかく良いパッケージなのに、研修紹介のチラシの文章からはどういうことをするのか理解するのが難しかった
- ・ICF の視点をどう支援改善につなげていくのか、事例の提示があればイメージがしやすかった

D. 考察

1) ICF および ICT を活用した PDCA サイクル支援パッケージの効果検証のための社会実装研究—強度行動障害者を支援する事業所における試行調査(一次調査)—

試行調査の結果、PDCA 支援パッケージの評価として、

- ・ICF を活用することで対象者の障害特性や環境要因を含めた全体的な理解が可能となった
- ・ICT を活用することで短時間に効率的な記録が可能となり、支援者の負担の軽減につながった
- ・PDCA 支援パッケージを活用することで情報の収集と支援者間での共有がしやすくなった
- ・PDCA サイクルで支援を行うことで、支援の見直しがしやすくなった

等の効果があった。また、実践事例では、PDCA 支援パッケージを活用することで、対象者本人の特性や背景要因の把握が進み、新たな支援手順書によって物を投げる行為の減少につなげることができていた。

これらの結果より、強度行動障害の状態にある者への支援において課題となっている「目に見えにくい障害特性や強み、環境要因等の包括的な情報収集」や「収集した記録の分析と関係者間での情報共有」などについて改善が期待できるツールとして、PDCA 支援パッケージが有用であることが確

認できた。

一方で、「ICF で情報を入力する上で労力が必要」、「ICT の環境整備が不十分なことや操作が不慣れなこと」、「背景要因を捉える上では支援者のスキルが必要」といった課題が確認でき、さらなる PDCA 支援パッケージの改善と試行が必要であると考えられた。

2) ICF および ICT を活用した PDCA サイクル支援パッケージの効果検証のための社会実装研究—強度行動障害者を支援する事業所における試行調査および実践検討・意見交換会の実施（二次調査）—

試行調査の結果、PDCA 支援パッケージの評価として、評価点では、

「パッケージの全体評価 (Q7)」は、「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答の割合が全体の 76.0%であり、また、「利用者の全体像の把握 (Q1)」が 92.0%、「情報の収集 (Q3)」が 76.0%、「記録の分析 (Q6)」が 72.0%であった。

具体的には、

- ・ ICF は対象者の障害特性や環境要因の把握に効果的であり、情報の整理がしやすくなった
- ・ ICT は記録と分析に効果的であり、記録にかかる負担の軽減に効果的であった
- ・ ICF、ICT を活用することで情報が視覚化され、支援者間の共有がしやすくなった
- ・ PDCA 支援パッケージによる PDCA サイクルを行うことで、支援計画や支援手順書の作成と見直しにつながった等の効果があった。

これらの結果より、強度行動障害の状態にある者への支援において PDCA 支援パッケージの活用が効果的であることが確認できた。

一方、評価点において、「情報共有 (Q4)」と「記録の負担 (Q5)」の「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答の割合が全体の 52.0%、48.0%と他の項目に比べて低かった。理由として、「今回の調査期間で他機関と情報共有する機会がなかった」、「ICF システムの記録は項目数の多さや内容の難

しさがあった」、「アプリで即時的に記録できない状況があり転記が必要であった」、

「Observations の記録を手軽に共有できるとよい」といった回答があった。今後の課題として、強度行動障害支援における ICF システムの記入内容の検討、事業所における ICT 活用環境の整備、パッケージを活用した他機関との共有事例の試行の必要性等が考えられた。

また、「ほぼ一人で試行しており、施設全体の理解と協力が必要」、「職場内での ICT の環境整備が必要」、「ICT の理解や取り扱いで支援者間の格差が生じる」、「PDCA 支援パッケージのレクチャーのための説明や研修等があればよい」といった回答があった。パッケージを支援現場で活用していくためには、事業所全体の取り組み、事業所内で推進していく中心人物の存在、パッケージの導入効果を含めたわかりやすい資料の必要性等が重要であると考えられた。これら課題の解決に向けて、継続的な試行と検討が必要であると考えられた。

E. 結論

一次調査、二次調査の結果より、ICF を活用することで対象者の全体的な理解と情報の整理、ICT を活用することで効率的な記録と分析、支援者の負担の軽減などに効果があり、PDCA 支援パッケージを活用することで効果的な情報収集と事業所の支援者間での情報共有、支援計画の作成と見直しの実践などに有効であることが確認できた。この結果を踏まえて、PDCA 支援パッケージ（「行動と環境の包括的アセスメントによる環境調整支援パッケージ」）を完成させた。

一方で、本研究で活用した ICF システムや Observations の使い勝手、事業所での ICT 環境の整備、支援パッケージの周知、学習の機会の必要性などの課題も明らかになった。今後も支援現場での試行と改善に向けた取り組みが求められる。

【文献】

- 1) 佐々木茜、日詰正文、村岡美幸：強度行動障害者の研修カリキュラム及び研修運営に関する実態調査 国立のぞみの園研究部紀要, 12 : p39-63 (2019).
- 2) 2019 年度障害者総合福祉推進事業「強度行動障害児者に携わる者に対する体系的な支援スキルの向上及びスーパーバイズ等に関する研究」報告書 一般社団法人全日本自閉症支援者協会, (2020).
- 3) 日詰正文、岡田裕樹、内山聡至ほか：強度行動障害者支援のための ICF、ICT を活用した PDCA サイクルの運用マニュアル案作成のための研究 令和 2 年度厚生労働科学研究費補助金報告書 (2021).
- 4) 安達潤：ICF の視点に基づく情報把握・共有システムの研究開発—知的障害・発達障害児者支援における多領域連携の実現に向けて— 発達障害研究 40(4):336-351(2018).
- 5) 井上雅彦, 中谷啓太, 東野正幸：行動上の問題に対する行動記録アプリケーション “Observations” の開発 行動分析学研究, 34 (1) : 78-86 (2019) .

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

別添4-1

ICF および ICT を活用した PDCA サイクル支援パッケージ
の効果検証のための社会実装研究

—強度行動障害者を支援する事業所における試行調査

(一次調査) —

分担研究報告書

令和3年度厚生労働科学研究費補助金
(障害者政策総合研究事業(身体・知的等障害分野))

研究課題名(課題番号):強度行動障害者支援に関する効果的な情報収集と関係者による情報共有、
支援効果の評価方法の開発のための研究(20GC1005)
分担研究報告書

分担研究課題名:ICFおよびICTを活用したPDCAサイクル支援パッケージの効果検証のための社会
実装研究—強度行動障害者を支援する事業所における試行調査(一次調査)

主任研究者:日詰正文(国立重度知的障害者総合施設のぞみの園)
分担研究者:安達潤(北海道大学)
井上雅彦(鳥取大学)
研究協力者:岡田裕樹(国立重度知的障害者総合施設のぞみの園)
内山聡至(国立重度知的障害者総合施設のぞみの園)
高橋理恵(国立重度知的障害者総合施設のぞみの園)

研究要旨

本研究は、令和2(2020)年度に開発したICF(国際機能分類)、ICT(情報通信技術)を活用した、効果的な利用者情報の把握や記録の収集・分析・共有を行うための強度行動障害PDCAサイクル支援パッケージ(以下、PDCA支援パッケージ)の支援現場での試行と、効果や課題を把握するための調査を行った。具体的には、PDCA支援パッケージのICFを活用した利用者の全体像の把握、ICTを活用した行動の記録と共有、冰山モデルを活用した背景要因の分析、支援手順書の作成と見直し、といったプロセスと、支援パッケージ全体についての評価を調査した。結果として、「ICFを活用することで対象者の全体的な理解が可能となった」、「ICTを活用することで短時間に効率的な記録が可能となった」、「PDCA支援パッケージを活用することで情報の収集と支援者間での共有がしやすくなった」、「PDCAサイクルで支援を行うことで、支援の見直しがしやすくなった」といった効果があり、PDCA支援パッケージが強度行動障害の状態にある者への支援において有効であることが確認できた。

A. 研究目的

1. 背景

先行研究より、強度行動障害の状態にある者への支援において、「目に見えにくい障害特性や強み、環境要因等の包括的な情報収集ができておらず、場当たりの対応計画になっている」、「収集した記録の分析を関係者間で情報共有する仕組みがないために、個々の担当職員の負担感やモチベーションの低下等につながっている」等の課題が指摘されている。そのため、問題となっている行動の背景要因を見つけること、立案した支援計画に基づいて迅速かつ一貫性をもって取り組むことが強度行動障害者支援における課題であり、この2つの課題の解決には、対象者の生活全体を網羅的に把握点検

することと、支援の記録と分析を迅速に行う仕組みのモデルが必要になる。

この課題に対応するため、国立のぞみの園では、令和2(2020)年度の研究において、既存の実践のなかで有用と考えられるICF(国際機能分類)やICT(情報通信技術)を活用し、効果的な利用者情報の把握や記録の収集・分析・共有を行うためのPDCA支援パッケージを開発した。このPDCA支援パッケージを支援現場で活用していくために、効果の検証のための社会実装研究が必要となっていた。

2. 目的

本研究は、PDCA支援パッケージを実際の支援現場で試行するとともに、効果や課題を収集

し、PDCA 支援パッケージの実用化に向けた資料とすることを目的とした。

B. 研究方法

本研究は、以下の方法により行った。

■調査対象: 強度行動障害者支援に取り組んでいる事業所 14 カ所 (本研究の研究協力者の所属する事業所および推薦のあった事業所から選定) とした。調査対象事業所の事業種別は、施設入所支援 5 カ所、共同生活援助 3 カ所、生活介護 4 カ所、就労継続支援 B 型 1 カ所、医療機関 (精神科病棟) 1 カ所であった。

■調査内容:

(1) PDCA 支援パッケージの試行

各事業所で対象となる利用者を選定し、PDCA 支援パッケージを使って情報の整理、行動の記録、支援手順書の作成と見直しを繰り返し行った。

本調査では、ICF のツールとして、「ICF 情報把握・共有システム」、ICT のツールとして、「Observations」を使用した。

(2) 試行後のアンケート調査

試行調査を行った事業所の支援者を対象に、PDCA 支援パッケージについての評価点 (5 件法) と、効果や課題等の意見収集を行うためのアンケート調査を行った。

調査内容は表 1 の通りである。

表 1 アンケート調査の内容

Q1. 利用者の障害特性や強み、環境要因等の把握・整理が行いやすくなったかどうかについて教えてください
Q2. 支援課題が焦点化され、支援計画が具体的になったかどうかについて教えてください
Q3. 支援者が支援に必要な利用者情報や記録の収集が行いやすくなったかどうかについて教えてください
Q4. 関係者間での利用者情報や支援に関する情報共有が行いやすくなったかどうかについて教えてください
Q5. 記録に係る負担感の軽減が図れたかどうかについて教えてください
Q6. 支援に必要な利用者情報および記録等の分析がしやすくなったかどうかについて教えてください
Q7. 試行調査で実施した本パッケージ全体に関する評価について教えてください
Q8. 本パッケージの改善点等があれば教えてください (例: 実施手順、使用ツール等)

■調査期間: 令和 3 (2021) 年 5 月 24 日から 7 月 31 日

(倫理面への配慮)

調査の手続きについては、国立のぞみの園調

査研究倫理審査委員会で承認を得た。

■PDCA 支援パッケージについて

・本研究において PDCA 支援パッケージは、以下 (表 2) のプロセスを PDCA サイクルで行うものとした。

表 2 支援パッケージ試行の流れ

① ICF システムへ記入し全体像の把握
・ ICF 情報把握・共有システム (以下、ICF システム) の「情報把握シート」に対象となる利用者の情報を記入する。
・ 「情報把握シート分析アプリ」を使い内容を整理する。
② 利用者の担当者が行動記録表を記入し、課題となる行動を選定
・ Observations Sheet を使用し、対象となる利用者の行動を記録する。
③ 利用者の担当者が課題となる行動のベースラインを記録
・ Observations2 を使用し、対象となる利用者の行動の頻度や時間帯を記録し、行動の傾向を確認する。
④ 利用者の担当者が冰山モデルシートまたはストラテジーシートの作成
・ 冰山モデルシート等を使用し、課題となっている行動の背景要因を分析する。
⑤ 利用者の担当者が支援手順書を作成
・ ①~④の内容を踏まえて支援手順書を作成する。
⑥ 利用者の担当者等が支援の実施および行動の記録
・ Observations2 を使用し、⑤で作成した支援手順書を基に支援を行い、対象となる利用者の行動の頻度や時間帯を記録する。
⑦ 記録の分析
・ Observations の分析用ホームページを使用し、記録データの分析を行う。
⑧ ICF システムへ記入し、支援前後の全体像の把握
・ 記録の分析を踏まえて、①で記入した ICF システムを見直し、支援前後の全体像を比較する。必要に応じて加筆修正を行う。
⑨ 支援手順書の修正
・ 支援手順書の内容を見直し、必要に応じて修正する。

C. 研究結果

1. 調査結果

調査対象のうち 14 カ所、19 名から回答を得た。質問ごとの回答は以下の通りであった。

Q1. 利用者の障害特性や強み、環境要因等の把握・整理が行いやすくなったかどうかについて教えてください

評価点 (図 1)

・ 「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答は 16 名で、全体の 84.2%であった効果

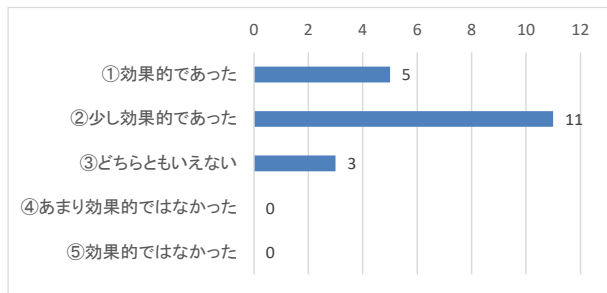


図1 回答結果 (Q1 評価点) (n=19)

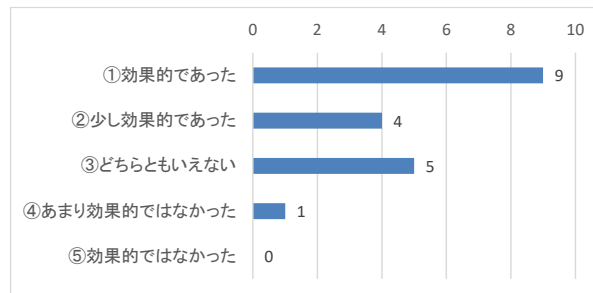


図2 回答結果 (Q2 評価点) (n=19)

- ・利用者の障害特性、強みの把握と整理が行いやすくなった
 - ・ICFによって環境要因も含めた利用者の理解が進み、支援の組み立てがしやすくなった
 - ・ICFによって既に把握していた情報の整理や、行ってきた支援の振り返りができた
- 課題
- ・ICFの設問が利用者の状況・状態に合わないものがあった (表3)

表3 回答結果 (Q1 記述)

効果的であった・少し効果的であった
<ul style="list-style-type: none"> ・事前の記録に負担感はあるものの、障害特性や強みの把握・整理については行いやすくなった。 ・事前にICFの視点で整理を行ったことで、記録収集後の支援の組み立てを行う際に広い視点で捉えることができた。 ・ICFへの記入作業を通じて、本人理解が進んでいる部分とそうでない部分とが明確になった。 ・ICTのアプリを使用することで、課題となる行動がどの場面で多く見られるのかという傾向をつかむことが出来た。 ・項目に沿って状況を記載することで、支援が足りていない部分を視覚的に確認することができた。 ・対象者の障害特性や強みに関しては、既に情報を整理していた。情報の答え合わせや確認として有効であった。 ・日頃行っているアセスメントに比べ、より様々な視点から障害特性や環境要因について考えることができた。 ・「強み」が一覧として出るのがよかった。
どちらともいえない
<ul style="list-style-type: none"> ・ICFの調査票を利用したが、設問が対象利用者の状況・状態に合わないものもあり、回答に苦慮したため。 ・明らかにしやすくなったとは感じない。

Q2. 支援課題が焦点化され、支援計画が具体的に became かどうかについて教えてください
評価点 (図2)

- ・「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答は13名で、全体の68.4%であった

- 効果
- ・支援課題が明確となり、焦点が絞りやすくなった
 - ・課題や変化が整理され、具体的な支援計画の作成につながった
- 課題
- ・本人のニーズや意思をしっかりと把握しておく必要がある (表4)

表4 回答結果 (Q2 記述)

効果的であった・少し効果的であった
<ul style="list-style-type: none"> ・ICFシステムへの入力と、Observationsを使用することで、支援課題の焦点化につながった。 ・分析し把握した本人の強みや環境設定を組み合わせることで具体的な支援計画を立てることができた。 ・支援課題が明確となるため、支援の焦点が絞りやすく効果的だった。 ・支援計画作成時やモニタリング時についても、その都度の課題や変化が明確になるため、かなり具体的な支援計画の作成につながった。 ・時間、場面、課題行動以前の状況等が整理され、またすぐにスクリーンプロットで傾向を確認できることによって把握がしやすくなり、結果として細やかな支援手順書につながった。 ・冰山モデルを使用するため、知識や支援方法、様々なパターンを考慮して書く必要があり、最終的には支援員の技量によると感じた。 ・資料としてはとても細かいため、グラフ等で強み・困りごとがわかるとより個別支援計画に活かしやすかった。
どちらともいえない
<ul style="list-style-type: none"> ・支援が足りない部分は確認しやすかったが、支援計画を具体的にたてる段階では、ICFを活用というよりもそれまでのノウハウで培ったもので支援計画を立てたという印象であった。 ・今回の調査では明確な課題を見つけることができなかった。
あまり効果的ではなかった・効果的ではなかった
<ul style="list-style-type: none"> ・支援計画の策定プロセスのなかで、本人のニーズ、意思をしっかりと把握した上でこの方法を用いるのはよいが、それがなければ個別支援計画にはつながりにくい。

Q3. 支援者が支援に必要な利用者情報や記録の収集が行いやすくなったがどうかについて教えてください

評価点 (図3)

- ・「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答は15名で、全体の78.9%であった

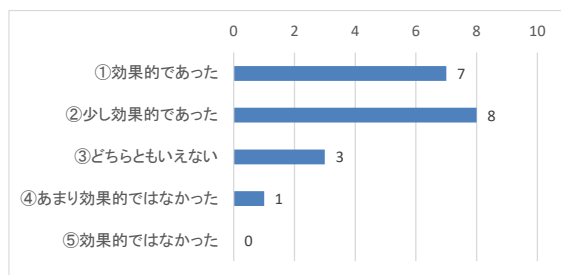


図3 回答結果 (Q3 評価点) (n=19)

効果

- ・ICTによって記録が簡素化され短時間で取ることができた
- ・スマホのアプリ (Observations) によって支援をしながらリアルタイムで正確に記録を取ることができた

表5 回答結果 (Q3 記述)

効果的であった・少し効果的であった	<ul style="list-style-type: none"> ・observationsによって、行動が現れた時にすぐに記録を取ることができた。 ・タブレット端末やアプリ等を活用することで入力までの時間が簡素化され、記録の収集が行いやすかった。 ・これまででは、利用者が帰宅後に支援者が現場のことを思い出しながら記録していたことが、リアルタイムで記録できるようになり、より正確な情報が収集しやすくなった。 ・携帯端末で、本人支援をしながらシンプルに記録が取れる点がとてもよかった。 ・ICFによる分類項目が詳細なため、あらためて本人情報の整理につながった。 ・他職種との連携の際に同一の指標を記入することで、多角的に利用者に関する支援状況をまとめることができた。 ・毎日入力することで利用者の情報がデータ化されて確認できるところが良かった。
どちらともいえない	<ul style="list-style-type: none"> ・情報を更新することで進捗と変化が把握でき、その都度の入力の手間も減るため、毎年積み重ねていくことに関して実用的である。 ・明らかにしやすくなったとは感じない。
あまり効果的ではなかった・効果的ではなかった	<ul style="list-style-type: none"> ・ソフトの使用方法についての理解が十分ではなく、使用の際に手間がかかる面があった。

課題

- ・ICTの使用についての理解が十分でなく手間がかかった (表5)

Q4. 関係者間での利用者情報や支援に関する情報共有が行いやすくなったかどうかについて教えてください

評価点 (図4)

- ・「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答は12名で、全体の63.2%であった

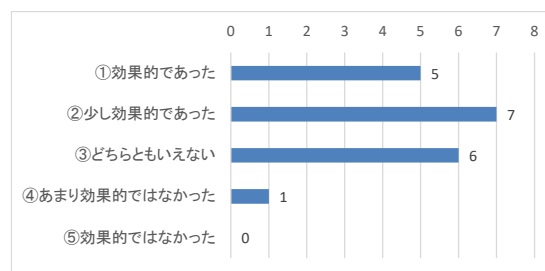


図4 回答結果 (Q4 評価点) (n=19)

効果

- ・ICFによる情報やICTによる記録によって情報が視覚的にわかりやすく確認できるため、支援者間で共有がしやすくなった
- ・利用者の行動が記録によって整理された

表6 回答結果 (Q4 記述)

効果的であった・少し効果的であった	<ul style="list-style-type: none"> ・ICTを用いることで、利用者の行動の特徴を確認しやすくなった。 ・関係者間で情報を共有する際、視覚的にわかりやすくなった。 ・目に見える形で利用者の行動を確認しやすくなった。 ・まとめ、分析をしたものを視覚的にわかりやすく確認できるため、支援者間で共有がしやすくなった。(今までは担当職員の力量にかかっていた。) ・行動が記録で整理されたことによって支援の優先順位がつけられた。 ・「この時間帯に課題行動が多い」など、データを見ながら支援者間で共有ができた。 ・ICF全体の情報を共有するには項目の量が多く、すべてを見て把握している支援者は少なかったと感じた。
どちらともいえない	<ul style="list-style-type: none"> ・今回の調査で支援者間の情報共有までいかなかった。 ・家庭や日中の通所先との間で、本人の行動観察に対するアプローチや考え方に相違がある場合には、同じツールを使用して課題行動の回数を記録するのは難しいのではないかと感じた。
あまり効果的ではなかった・効果的ではなかった	<ul style="list-style-type: none"> ・外部関係者と情報共有することがなく、情報共有ツールとしての効果ははっきりと確認できなかった。

め、支援の優先順位がつけやすくなった
課題

- ・ 家族や他機関と行動観察に対するアプローチや考え方に違いがある場合は、同じツールで記録を取ることが難しい（表6）

Q5. 記録に係る負担感の軽減が図れたかどうかについて教えてください

評価点（図5）

- ・ 「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答は16名で、全体の84.2%であった

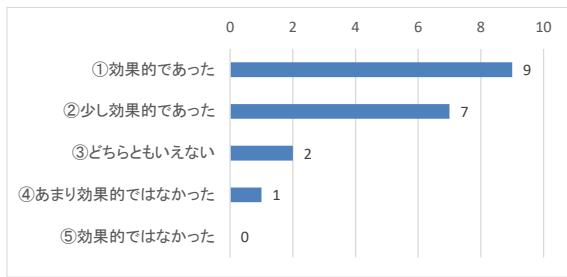


図5 回答結果（Q5 評価点） (n=19)

効果

- ・ スマホのアプリ（Observations）の入力が簡

表7 回答結果（Q5 記述）

効果的であった・少し効果的であった
<ul style="list-style-type: none"> ・ アプリで気軽に記録を取れることはとてもよかった。 ・ 打ち込み方法が簡単であり、すぐにスクリーンショットで提示されるため、記録の軽減につながった。 ・ 短時間で記録できるため、記録の漏れが少なくなった。 ・ ICT を用いることで行動の特徴を把握しやすくなり、記録を取ることの負担感が減った。 ・ アプリの入力はとても簡便で、自動でグラフ化してくれるため情報共有しやすかった。 ・ 何を記録すれば良いかがわかりやすく書き込みしやすい。ただ、記録時に違う支援者が異なる表記で記録してしまい何度か書き直ししてしまうことがあった。 ・ 支援中に携帯を操作することが難しく感じた。 ・ 手元にあることで正確な回数や時間の記録が取れる一方で、実際に支援をしながら記録を取るのが難しい入浴場面などでは、従来通り支援を終えてからの記録になることが多かった。
どちらともいえない
<ul style="list-style-type: none"> ・ ソフト自体の利用が初めてであったことやスマホを現場で使うことでの利用者への影響もあり、その場での打ち込みが難しい状況があった。
あまり効果的ではなかった・効果的ではなかった
<ul style="list-style-type: none"> ・ デバイスを持っていないと記録できないので、複数人で支援する際は手間がかかる。 ・ 複数のデバイスを持っていても、クラウド化されていないので意味がほとんどない。

単で短時間でできるため、記録の負担の軽減
につながった

課題

- ・ 支援中に記録を入力することが難しい場合がある（表7）

Q6. 支援に必要な利用者情報および記録等の分析がしやすくなったかどうかについて教えてください

評価点（図6）

- ・ 「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答は15名で、全体の78.9%であった

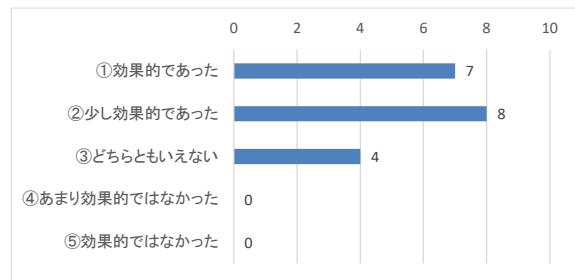


図6 回答結果（Q6 評価点） (n=19)

効果

- ・ 情報が整理されるため課題を絞りやすく、支援の計画を立てやすくなった
- ・ 記録がグラフ化されて視覚的にわかりやすくなるため記録の分析がしやすくなった

課題

- ・ 記録は効率的に取ることができたが、分析は支援者のスキルが求められる（表8）

表8 回答結果（Q6 記述）

効果的であった・少し効果的であった
<ul style="list-style-type: none"> ・ 課題である行動やその時間帯など絞り込みやすく、情報の分析がしやすくなった。 ・ すぐに表に結果として転換されるため、分析する時間までが短時間であった。 ・ スクリーンショットですぐに確認できるため、把握しやすく、支援者間でブレが少なかった。 ・ 利用者情報の打ち込みは大変だが、情報が整理されているので支援を計画する際には効果的だと感じた。 ・ 集計は、手早く行えるようになったが、記録の分析、潜在的な部分については、まだまだ担当職員の力量にかかっているように感じた。
どちらともいえない
<ul style="list-style-type: none"> ・ 記録に基づいた分析の行程まで進めることができなかったため、評価は難しい。

Q7. 試行調査で実施した本パッケージ全体に関する評価について教えてください

評価点 (図7)

- ・「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答は16名で、全体の84.2%であった

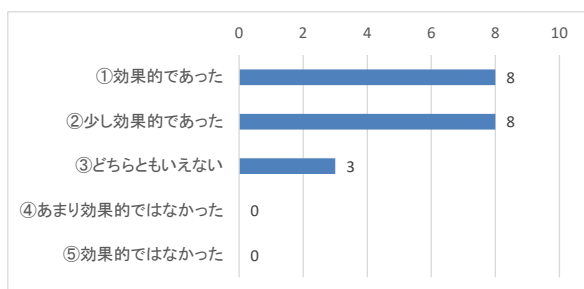


図7 回答結果 (Q7 評価点) (n=19)

効果

- ・ ICF、ICT を活用することで情報の収集と共有がしやすくなり、課題が見えやすくなった
- ・ 短時間で効率的に記録を取ることができ、負担の軽減につながった
- ・ PDCA サイクルを行うことで支援の見直しが可能となり、支援者間で更新をしていくこと

表9 回答結果 (Q7 記述)

効果的であった・少し効果的であった
<ul style="list-style-type: none"> ・ 今後パッケージを活用することで、短時間で記録を取ることができ、また目に見える結果を踏まえて、再評価、実施とスピーディーに進むことが期待できる。 ・ ICF、ABA、冰山モデルと多角的な視点で利用者情報を把握することで、利用者本人の困りごとや心配ごとをサポートできる。 ・ ICF や ICT を使用することで、情報の共有がしやすく見える化が図れた。 ・ 「本人の情報整理→観察と記録→手順書の作成と支援→支援の振り返り」という一連のサイクルに集中的に取り組むことで、本人の理解を固定させずに常に更新していく必要性を実感することができた。 ・ 新規利用者の入所時や、利用者本人の環境が大きく変化したタイミングなどでは必ず役に立つシステムである。 ・ システムに不慣れであったため、新規課題の取り組みに対しての労力が大きかった。ただ、システム自体は使いやすく、慣れてしまえば一定の効果が得られると感じた。 ・ 全体的には効果的である。ただ、ICF シートへの記入量の多さは負担になるように感じられた。 ・ ICF シートへの入力を標準化していくためには、解釈も含めてもう少し平易な言葉で、また指標等も明確である必要がある。
どちらともいえない
<ul style="list-style-type: none"> ・ ICT という意味では、クラウド化されて初めて達成できると感じた。 ・ 記録は当事業所で使用している紙ベースの生活記録表の方が現時点では使いやすい。

の必要性を確認することができた
課題

- ・ ICF は効果的であるが、情報を入力する上で労力がかかる
- ・ ICT に不慣れであることや、Observations のクラウド化や操作に関する課題がある (表9)

Q8. 本パッケージの改善点等があれば教えてください (例: 実施手順、使用ツール等)

ICF について

- ・ ICF 情報把握シートの記載は項目が多く、また現在の生活を見ているだけでは記載できない箇所も多々見られた
- ・ 教育・医療・福祉の連携が重要になってくるが、利用者本人が生活場所を移行する際の資料の一つとして ICF シートのデータを活用することで、受ける事業所側の初期負担の軽減につながるとともに、本人への支援がスムーズに行われるのではないかと
- ・ ICF は幼少期から記録がつながり続けることで、より適切な分析ができるのではないかと

ICT (Observations) について

- ・ Observations Sheet に関して、分析 HP を開かないと記録の一覧が見られないことは少し負担感があり、アプリからも直接一覧が見られることが望ましい
- ・ 行動記録の入力方法 (書き方・表現) について例示があると入力方法が統一でき分析しやすくなるように感じた
- ・ Observations は、記録の合理化や共有・分析で利用できる可能性は感じたが、使い方の周知、それぞれの現場での使い方には工夫が必要と思われた
- ・ クラウド上でデータが保存、共有できれば便利である
- ・ 将来的には冰山モデルや支援の手順書作成と連動して落とし込めるようにできればよい

パッケージについて

- ・ 冰山モデルシートも記入用紙だけではなく、記入することで支援方法の提案や関連性が考えられる項目の候補が出てくるツールやアプリになれば、支援者による技量や考え方によ

る差は少なくなると感じた

- ・ ICF システムの記入完了までと、冰山モデルシート作成後に支援手順書を作成の期間がかなりタイトで、支援会議等の時間をしっかりととって考えることができなかった
- ・ 課題となる行動の選定とリストアップにより、本人の行動観察がより明確になる一方で、回数や頻度に現れてこない課題に関しては、支援者側の関わりや環境について平時の記録も併せて残しておく必要性を感じた
- ・ 家庭での様子の記録、違いを分析できたらよいと感じた
- ・ 冰山モデルの記載が、今回のツールとの連動をあまり感じ取れない

2. PDCA 支援パッケージの実践事例

本研究において、試行した事業所で PDCA 支援パッケージを実践した事例を紹介する。

(1) 対象者の概要

対象者：A 氏

性別：女性

障害特性：

- ・ 重度の知的障害、自閉スペクトラム症。
- ・ 絵カードや写真、文字(数字)の理解があり、支援に活用している。
- ・ コミュニケーションは一方的であり、独特の話し言葉で表出している。
- ・ 環境の変化や見知らぬ人からの介入等、見通しの持てない状況が苦手である。
- ・ 興味の幅が狭く、特定の物事に強く固執し、活動へ参加できないことがある。
- ・ 手先が器用で、細かな作業、活動を好む。

行動の特徴：

- ・ 日常的に気分の急変があり、突発的に興奮状態となる。
- ・ 興奮状態になると他傷行為(主につかみかかり、髪引き・噛みつき・頭突き・足蹴り)に至る。
- ・ また他傷行為以外にも物壊し・絶叫・号泣などや、自傷行為(主に自ら後方へひっくり返り後頭部を床へ打ち付ける・壁や扉へ頭突き・腕を噛む)がみられる。
- ・ 生活のいたるところで物事への激しいこだわりがある。様々な物事へこだわり、一度こ

だわると気が済むまで続く。(バンドエイド、ティッシュ、紙切り等)

(2) PDCA 支援パッケージを使用した実践の流れ

① ICF システムへの記入

【準備】

具体的なエピソードを把握するために、ベテラン職員及び利用者の特性をよく理解している職員へ、聴き取りを行った。

② 行動記録表の記入

Observations Sheet を使用し、「他傷行為」をターゲットに 1 週間記録を取った。

【準備】

- ・ アプリ操作のマニュアルを作成した。
- ・ 紙媒体でのメモを用意した(長文での記録を行うため)。
- ・ 日毎に担当者を決め、端末を所持した。

③ 行動のベースラインの記録

Observations2 を使用し、行動の記録を取った(図8)。

【準備】

- ・ アプリの操作マニュアルを作成した。
- ・ 複数職員が記録を取るため、端末の置き場所を固定し、活動時は付き添い職員が所持した。

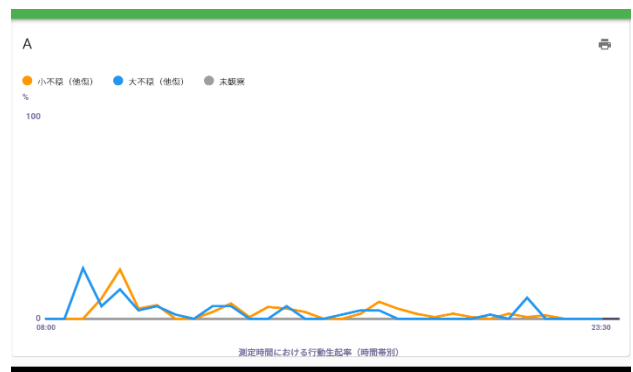


図8 行動の時間帯別頻度 (Observations2 による記録)

④ 冰山モデルの作成

事業所で既に作成していた冰山モデルに、①～③で把握した情報から分析した背景要因等を加筆した(図9)。

加筆した内容

(本人の特性)

- ・ 生活リズムが崩れやすい

- ・慣れ親しんだ人以外との関わりがストレスになる
- ・緊張や不快を訴えることが苦手
- ・他者の気持ちを理解することが苦手
- ・非言語を理解することが苦手
- ・場面に合わせて行動することが苦手
- ・手先を使う細かな活動が得意
(環境・状況)
- ・慣れ親しんだ人がいつもいるとは限らない
- ・初対面の人や外部の人の出入りがある
- ・場面の状況が理解しにくい環境

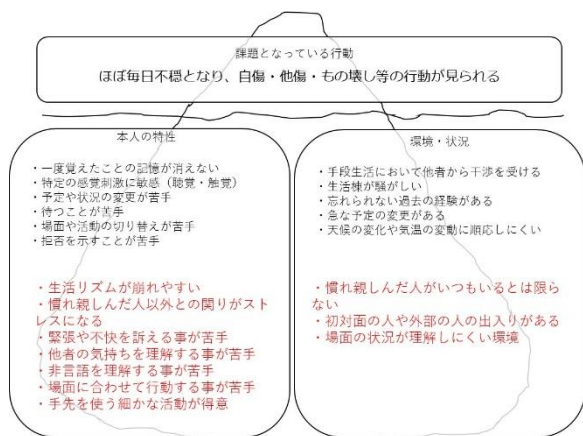


図9 氷山モデル

⑤支援手順書の作成

- ・③の記録から、起床直後に不穏な様子になることがわかった。
- ・対応として、手先の器用さ、集中力の高さといった強みがあることから、朝食のサイドメニューを選び、自身で簡単な調理を行ってもらうプランを立てた。

⑥行動の記録

Observations2 を使用し、⑤で作成した支援手順書を基に支援を行い、行動を記録した。

⑦分析用 HP

Observations 分析 HP にアップデートし記録の分析を行った。

⑧支援前後の全体像の把握

行動の記録等を踏まえて ICF システムを見直した。

⑨支援手順書の修正

以下の点を修正した。

- ・サイドメニューの調理、喫食は楽しんで行っている一方、喫食後に食器を投げる行為が続いたため、食器を本人が選んで購入したものに変更した。
- ・PECS (絵カード) を使用し、食器や調味料を自身に選んでもらった。
- ・結果として、食器を投げる行為が減少した。また、自身も割れてほしくないため、床に軽く置く行動に変化していった。

(3) PDCA 支援パッケージの効果と課題

ICF (ICF システム) について

【効果】

- ・ICF システムに落とし込んでいくことで、より具体的に細かく分析することができ、特性把握につながった。
- ・Excel も入力しやすく、一度入力が完了した後も修正・加筆がしやすかった。
- ・カテゴリ別 (強み、支援の維持・調整、支援の修正など) に分かれることで、支援者以外の人が見ても、特性の把握がしやすいのではないかと感じた。

【課題】

- ・量が多いため記入の時間を要する。
- ・職員によって対象者の見立てに違いがあるため、記入者によって内容に変化があるかもしれない。

ICT (Observations) について

【効果】

- ・過去の記録を振り返りやすかった。
- ・過去の記録がタブ付けされるため、入力が省略できた。
- ・行動の機能をチェックすることで、アプリ内で機能分析をされるため手間が省略された。
- ・入力方法がシンプルで分かりやすく、記録から分析までの負担が軽減された。
- ・入力ごとに、アプリ上で生起頻度の高い時間帯のグラフが更新されていくため、一目で把握することができた。
- ・対象利用者の全体像をより詳細に把握できるツールであり、システムを入力することで利用者のことを深く考える機会となった。

- ・ 行動障害のみの近視眼的な視点ではなく、利用者の幅広い環境や経験に目を向け、生活の質を評価する気づきとなった。
- ・ 関係機関との情報共有の際の共通言語として活用できる可能性を感じた。

【課題】

- ・ 端末操作の苦手な職員にとっては入力にかえて時間がかかった。
- ・ 現場で入力できずに、紙媒体にメモを取って後から入力するといったことがあった。
- ・ 一端末につき一アプリのため、別端末でのログインができず、当該端末を持っていないと記録が行えない状況であった。
- ・ 記録分析の労力が軽減され、ICTの活用は支援現場では欠かせないものであると実感した。
- ・ 支援者がICTを活用する習慣を身に付けるとともに、支援者全員が扱えるシンプルさも重要だと感じた。

D. 考察

試行調査の結果、PDCA 支援パッケージの評価として、

- ・ ICF を活用することで対象者の障害特性や環境要因を含めた全体的な理解が可能となった。
- ・ ICT を活用することで短時間に効率的な記録が可能となり、支援者の負担の軽減につながった。
- ・ PDCA 支援パッケージを活用することで情報の収集と支援者間での共有がしやすくなった。
- ・ PDCA サイクルで支援を行うことで、支援の見直しがしやすくなった。

等の効果があった。また、実践事例では、PDCA 支援パッケージを活用することで、対象者本人の特性や背景要因の把握が進み、新たな支援手順書によって物を投げる行為の減少につながることができていた。

これらの結果より、強度行動障害の状態にある者への支援において課題となっている「目に見えにくい障害特性や強み、環境要因等の包括

的な情報収集」や「収集した記録の分析と関係者間での情報共有」などについて改善が期待できるツールとして、支援パッケージが有用であることが確認できた。

一方で、「ICF で情報を入力する上で労力が必要」、「ICT の環境整備が不十分なことや操作が不慣れなこと」、「背景要因を捉える上では支援者のスキルが必要」といった課題が確認でき、さらなる PDCA 支援パッケージの改善と試行が必要である。

E. 結論

本研究により、強度行動障害の状態にある者の支援において、PDCA 支援パッケージが有効であることが確認できた。一方で、試行調査の対象は限定的であり、PDCA また支援パッケージに関する課題も明らかになったことから、さらなる社会的な実装研究が重要である。

【文献】

- 1) 佐々木茜、日詰正文、村岡美幸：強度行動障害者の研修カリキュラム及び研修運営に関する実態調査 国立のぞみの園研究部紀要, 12 : p39-63 (2019).
- 2) 2019 年度障害者総合福祉推進事業「強度行動障害児者に携わる者に対する体系的な支援スキルの向上及びスーパーバイズ等に関する研究」報告書 一般社団法人全日本自閉症支援者協会, (2020).
- 3) 日詰正文、岡田裕樹、内山聡至ほか：強度行動障害者支援のための ICF、ICT を活用した PDCA サイクルの運用マニュアル案作成のための研究 令和 2 年度厚生労働科学研究費補助金報告書 (2021).
- 4) 安達潤：ICF の視点に基づく情報把握・共有システムの研究開発—知的障害・発達障害児者支援における多領域連携の実現に向けて— 発達障害研究 40 (4) : 336-351 (2018).

- 5) 井上雅彦, 中谷啓太, 東野正幸: 行動上の問題に対する行動記録アプリケーション“Observations”の開発 行動分析学研究, 34 (1) : 78-86 (2019).

G. 研究発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

ICF および ICT を活用した PDCA サイクル支援パッケージ
の効果検証のための社会実装研究
—強度行動障害者を支援する事業所における試行調査
および実践検討・意見交換会の実施（二次調査）—

分担研究報告書

令和3年度厚生労働科学研究費補助金
(障害者政策総合研究事業(身体・知的等障害分野))

研究課題名(課題番号):強度行動障害者支援に関する効果的な情報収集と関係者による情報共有、
支援効果の評価方法の開発のための研究(20GC1005)
分担研究報告書

分担研究課題名:ICFおよびICTを活用したPDCAサイクル支援パッケージの効果検証のための社会実装研究—強度行動障害者を支援する事業所における試行調査および実践検討・意見交換会の実施(二次調査)—

主任研究者:日詰正文(国立重度知的障害者総合施設のぞみの園)
分担研究者:安達潤(北海道大学)
井上雅彦(鳥取大学)
研究協力者:岡田裕樹(国立重度知的障害者総合施設のぞみの園)
内山聡至(国立重度知的障害者総合施設のぞみの園)
高橋理恵(国立重度知的障害者総合施設のぞみの園)

研究要旨

本研究は、令和2(2020)年度に開発したICF(国際機能分類)、ICT(情報通信技術)を活用した強度行動障害PDCA支援パッケージ(以下、PDCA支援パッケージ)について、令和3(2021)年5~7月に実施した支援現場での試行調査(一次調査)の結果を踏まえ、さらなる効果や課題を把握するための調査を行った。具体的には、PDCA支援パッケージの試行と、効果や課題等を広く収集するための「実践検討・意見交換会」を実施し、PDCA支援パッケージの実用化に向けた資料とすることを目的とした。

結果として、全国から52名の応募があり、そのうち29名が試行調査に参加した。試行調査後のアンケート調査結果より、「ICFは対象者の障害特性や環境要因の把握に効果的であり、情報の整理がしやすくなった」、「ICTは記録と分析に効果的であり、記録にかかる負担の軽減に効果的であった」、「ICF、ICTを活用することで情報が視覚化され、支援者間の共有がしやすくなった」、「PDCA支援パッケージによるPDCAサイクルを行うことで、支援計画や支援手順書の作成と見直しにつながった」等の効果があり、PDCA支援パッケージが強度行動障害の状態にある者への支援において有効であることが確認できた。

A. 研究目的

1. 背景

本研究において、令和3(2021)年4月~7月に強度行動障害PDCA支援パッケージ(以下、PDCA支援パッケージ)の効果の検証を目的とした試行調査を一次調査として行った。調査は本研究の研究協力者の所属する事業所および推薦のあった事業所から選定した14カ所を対象とし、調査内容は①PDCA支援パッケージの試行と、②PDCA支援パッケージについての評価点と効果や課題等の意見収集を行うためのアンケート調査であった。その結果、「目に見

えにくい障害特性や強み、環境要因等

の包括的な情報収集」や「収集した記録の分析と関係者間での情報共有」などについて改善が期待できるツールとして、PDCA支援パッケージが有用であることが確認できた。

一方で、試行調査の対象が限定的であり、またPDCA支援パッケージに関する課題も明らかになったことから、さらなる社会的な実装研究が求められた。

2. 目的

そこでPDCA支援パッケージを作成するため

の二次調査として、PDCA 支援パッケージの試行と効果や課題の収集を行うための「実践検討・意見交換会（以下、意見交換会）」を実施し、PDCA 支援パッケージの実用化に向けた資料とすることを目的とした。

B. 研究方法

本研究は、以下の方法により行った。

1. 意見交換会の実施

■開催方法：オンライン

■開催日：全3回とした

- ・第1回 令和3（2021）年10月29日
- ・第2回 令和3（2021）年11月29日
- ・第3回 令和4（2022）年1月13日

■募集人数：32名

■参加要件：以下の要件を提示の上、募集した。

- ・国立のぞみの園が開催する強度行動障害支援者養成研修（実践研修（指導者研修））修了者または修了者の推薦を受けた者
- ・全3回連続して出席できる者
- ・自閉症を中心とする強度行動障害がある方の直接支援を行っており、事業所長の推薦を受けた者
- ・スマートフォン、タブレットのアプリを用いた記録が可能なる者

2. 試行調査

■調査対象：意見交換会に参加した強度行動障害者支援に取り組んでいる事業所29カ所とした。

■調査内容：

（1）PDCA 支援パッケージの試行

対象利用者を選定し、PDCA 支援パッケージに沿って、情報の整理、行動の記録、支援手順書の作成と見直しを繰り返し行った。

本調査では、ICFのツールとして、「ICF 情報把握・共有システム」、ICTのツールとして、「Observations」（スマートフォンのアプリ）を使用した。

（2）試行後のアンケート調査

試行調査を行った事業所の支援者を対象に、PDCA 支援パッケージについての評価点（5件法）と、効果や課題等の意見収集を行うためのアンケート調査を行った。

表1 アンケート調査の内容

Q1. 利用者の障害特性や強み、環境要因等の把握・整理が行いやすくなったかどうかについて教えてください
Q2. 支援課題が焦点化され、支援計画が具体的になったかどうかについて教えてください
Q3. 支援者が支援に必要な利用者情報や記録の収集が行いやすくなったかどうかについて教えてください
Q4. 関係者間での利用者情報や支援に関する情報共有が行いやすくなったかどうかについて教えてください
Q5. 記録に係る負担感の軽減が図れたかどうかについて教えてください
Q6. 支援に必要な利用者情報および記録等の分析がしやすくなったかどうかについて教えてください
Q7. 試行調査で実施した本パッケージ全体に関する評価について教えてください
Q8. 本パッケージの改善点等があれば教えてください (例：実施手順、使用ツール等)

調査内容は、一次調査と同じ内容とした（表1）。

■調査期間：令和3（2021）年10月29日から1月31日

（倫理面への配慮）

調査の手続きについては、国立のぞみの園調査研究倫理審査委員会で承認を得た。

■一次調査を受けたPDCA支援パッケージに関する変更点

一次調査の結果より、課題点として下記があげられた。

【PDCA 支援パッケージの進め方】

- ・ICFシステムの記入完了期限および、冰山モデルシート作成後から支援手順書の作成までの期間がかなりタイトで、調査期間内に終わるために、支援会議等の時間をしっかりとって考えることができなかった

【PDCA 支援パッケージの内容】

- ・ICFシステムの内容が難しく理解するのに時間がかかる上、情報入力に労力が必要
- ・事業所によりICTの環境整備が不十分なことや操作が不慣れなこと
- ・行動の背景要因を捉える上では支援者のスキルが必要

上記の課題を踏まえ、二次調査となる本調査では、以下の点を改善した。

- ・試行期間を約1ヶ月延ばし、約3ヶ月とした
- ・ICFシステムの入力やICTの操作等の質問に速やかに対応するため、参加者との円滑な情

- 報共有を図った。具体的には、ビジネスチャットサービスの「chatwork」を活用した
- ・各回でグループごとの進捗確認に加え、各回の間にも進捗確認の機会を細かく設定した
 - ・第2回にICF試行途中での質疑応答等のフォローアップの時間を設定した
 - ・PDCA支援パッケージのプロセスに、「支援会議の実施」を明示した（対象者の特性や行動記録の共有、冰山モデルへの落とし込みを踏まえた背景要因を把握する作業をチームで

表2 支援パッケージ試行の流れ

<p>① ICFシステムへ記入し全体像の把握</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ICF情報把握・共有システム（以下、ICFシステム）の「情報把握シート」に対象となる利用者の情報を記入する。 ・「情報把握シート分析アプリ」を使い内容を整理する。 <p>② 利用者の担当者が行動記録表を記入し、課題となる行動を選定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アプリ「Observations Sheet」を使用し、対象となる利用者の行動を記録する。 <p>③ 記録の確認</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アプリの記録をPCに送る。 ・Observations分析用ホームページにデータをアップロードし、データを確認する。 <p>④ 利用者の担当者が課題となる行動のベースラインを記録</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アプリ「Observations2」を使用し、対象となる利用者の行動の頻度や時間帯を記録する。 ・行動の記録を積み重ねる。 <p>⑤ 記録の確認</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アプリの記録をPCに送る。 ・Observations分析用ホームページにデータをアップロードし、データを確認する。 <p>⑥ 支援会議を実施し、冰山モデルシートで行動の背景を整理する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・冰山モデルシートを使用し、課題となっている行動の背景要因を分析する。 <p>⑦ 支援手順書の作成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・①～⑥の内容を踏まえて支援手順書を作成する。 <p>⑧ 支援の実施および行動の記録</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アプリ「Observations2」を使用し、⑦で作成した支援手順書を基に支援を行い、対象となる利用者の行動の頻度や時間帯を記録する。 <p>⑨ 記録の確認</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アプリの記録をPCに送る。 ・Observations分析用ホームページにデータをアップロードし、データを確認する。 <p>⑩ ICFシステムへ記入し、支援前後の全体像の把握</p> <ul style="list-style-type: none"> ・記録の分析を踏まえて、①で記入したICFシステムを見直し、支援前後の全体像を比較する。必要に応じて加筆修正を行う。 <p>⑪ 支援手順書の修正</p> <ul style="list-style-type: none"> ・支援手順書の内容を見直し、必要に応じて修正する。

行うため)

以上を踏まえて、PDCA支援パッケージは、表2のプロセスをPDCAサイクルで行うものとした。

C. 研究結果

意見交換会の概要および試行調査の結果は以下の通りである。

1. 意見交換会について

(1) 応募人数：52名（30都道府県より応募あり）

(2) 参加人数：32名（オブザーバー参加13名）

- ・参加者の選定にあたっては、各都道府県から1名以上の参加とし、重複した都道府県については事業所種別に偏りがでないようにした

- ・選定されなかった者については、オブザーバー参加とした

- ・参加決定から第1回目までに3名キャンセルがあり、第1回目は29名で実施した

- ・第2回目から3名欠席があり、第2回目以降は26名で実施した

(3) 参加者の属性

①階級：管理職級が12名、主任支援員級が8名、支援員級が9名であった（表3）。

表3 参加者の階級 (n=29)

職級	人数(人)	構成比(%)
管理職級 (サビ管、児発管等)	12	41%
主任支援員級	8	28%
支援員級	9	31%

②強度行動障害者支援の経験年数：「10年以上」が16名、「1～3年」が5名、「7～9年」「4～6年」が各4名であった（表4）。

表4 参加者の強度行動障害者支援経験年数 (n=29)

経験年数	人数(人)	構成比(%)
10年以上	16	55%
7～9年	4	14%
4～6年	4	14%
1～3年	5	17%

③所属する事業所の種別：「施設入所支援」が12名、「生活介護」が9名、「行動援護」「放課後等デイサービス」が各3名、「共同生活援助」が2名であった。（表5）

表5 参加者の所属する事業所の種別 (n=29)

サービス種別	人数(人)	構成比(%)
行動援護	3	10%
相談支援	0	0%
生活介護	9	31%
施設入所	12	41%
共同生活援助	2	7%
放課後等デイサービス	3	10%

2. 調査結果

調査対象となった意見交換会の最終的な参加者26名のうち、25名から回答を得た。

質問ごとの回答は以下の通りである。

Q1. 利用者の障害特性や強み、環境要因等の把握・整理が行いやすくなったかどうかについて教えてください

評価点(図1)

- ・「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答は23名で、全体の92.0%であった

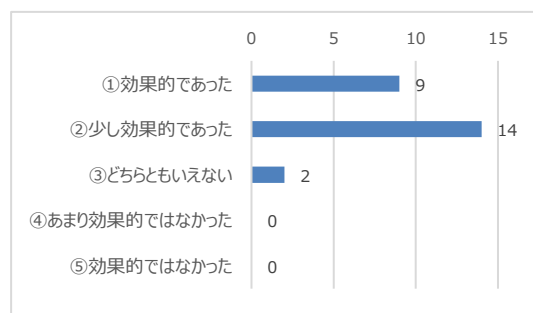


図1 回答結果(Q1評価点) (n=25)

効果

- ・特性や強み、環境要因に関する多くの項目が網羅されていたため、漏れなく情報を整理し把握することができた
 - ・利用者の強みや苦手な部分を分析するのに今までなかった視点で考えることができた
- 課題
- ・ICFシステムで問われる内容の理解が難しいため、簡略化されたものがあるとよい(表6)

表6 回答結果(Q1記述)

効果的であった・少し効果的であった
・特性や強み、環境要因に関する多くの項目が網羅されていたため、漏れなく情報を整理し把握することができた。
・今まで使用していたアセスメントよりも、気づかなかった部分を取り出すことができた。
・今までは、事業ごとに作成したアセスメントシートを使用していたが、利用者の全体像を把握したものになっていなかった。ICFシステムでは、入力した情報が本人の強みや支援の維持・調整、支援の修正、支援の考案といった項目に整理されて示されるので、全体像が把握しやすくなった。
・ICFシステムを作成することによって、強みや特性などが自動で分類されるため、効率的に整理されておりよかった。
・ICFシステム作成に関して求められるスキルやハードルの高さなど課題はあるが、シート自体は非常に有益なものと感じた。
・その利用者を知らない支援者も支援方法のイメージがつけやすくなると感じた。
・利用者の強みや苦手な部分を分析するのに今までなかった視点で考えることができた。
・記録を取りグラフ化することによってパート職員など知識をともなっていないスタッフに対して説明する時に大いに役に立った。
・問われている内容の理解が難しくアセスメントに反映できない支援員もいた。選択肢を設ける等、回答しやすい表現が多ければいいと感じた。
・ICFシステムは、だれでも見てわかるというくらいの簡略化されたものがあるとよいと感じた。
どちらともいえない
・ICFシステムは、入所施設というかなり限定された環境で生活している重度の知的障害のある利用者については効果が限定的だと感じた。
・新人や2、3年及び項目の理解が難しいと感じた経験が長い支援員もいた。しかし、この項目に解答できる力を1年プランで計画し、支援課全体で取り組めば、ICFの理解も深まり、利用者の強み等専門的な視野が広がるのではないかと考えている。

Q2. 支援課題が焦点化され、支援計画が具体的に became かどうかについて教えてください

評価点(図2)

- ・「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答は17名で、全体の68.0%であった

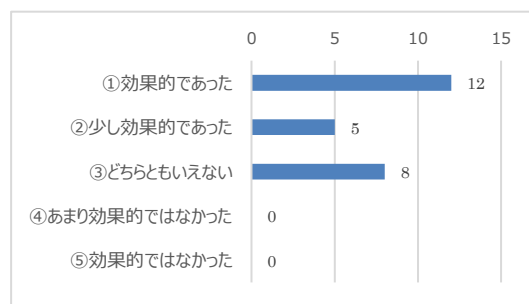


図2 回答結果(Q2評価点) (n=25)

効果

- ・ ICF システムを参考に冰山モデルシートで支援課題を整理し視覚化したことで、支援計画や支援手順書のどこを変えるべきか見えるようになった
- ・ 課題や状況が一目でわかるため、支援計画に反映する際にも効率的であった

課題

- ・ 焦点化された課題をどのように支援に結びつけていくかについてサポートが必要である（表7）

表7 回答結果（Q2 記述）

効果的であった・少し効果的であった
<ul style="list-style-type: none"> ・ 支援効果の大小が分類分けされるため、介入が必要なポイントや支援内容の見直しでクリアできる課題行動などわかりやすくてよかった。状況が一目でわかるため、支援計画に反映する際にも効率的であった。 ・ ICF システムを参考に冰山モデルシートで支援課題を整理し視覚化したことで、支援計画や支援手順書のどこを変えるべきか見えるようになった。 ・ 支援を実施していない部分は、焦点があたっていない（わかっていない）部分でもあったので、それが焦点化されてよかった。 ・ 焦点化された課題をどのように支援に結びつけていくかについてサポートが必要だと感じた。 ・ サービス管理責任者だけでなく直接支援する支援員には新しい視点があることが伝わったと感じた。 ・ 冰山モデルシートを作成したことで、障害特性、環境要因どちらに偏ることなく自然と目を向けることができた。職員の感覚に頼った支援をしていたことを反省した。
どちらともいえない
<ul style="list-style-type: none"> ・ 支援手順書の作成や課題行動に対しての支援が明確になったが、個別支援に影響したかまでは定かではない。 ・ 個別支援計画に直接反映されることはなかったが、日ごろの生活で気になる行動に対してアプローチすることができた。 ・ ICF への理解が深まらずそこから具体的な支援につなげることは難しかった。 ・ 支援課題が焦点化されたが、支援計画まで落とし込めなかった。

Q3. 支援者が支援に必要な利用者情報や記録の収集が行いやすくなったかどうかについて教えてください

評価点（図3）

- ・ 「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答は19名で、全体の76.0%であった

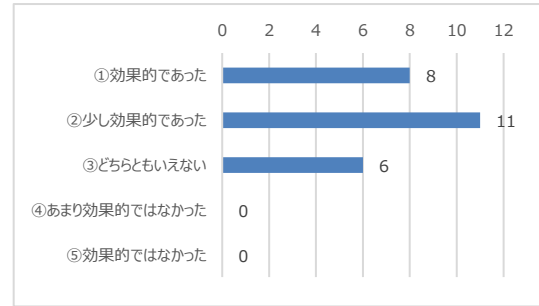


図3 回答結果（Q3 評価点）（n=25）

効果

- ・ 利用者に関する必要な情報を集めるという点で非常に効果的であった
- ・ 視覚化のしやすさや現場で記録を取れる点で効果的であった

表8 回答結果（Q3 記述）

効果的であった・少し効果的であった
<ul style="list-style-type: none"> ・ 一人の利用者に関する必要な情報を集めるという点では非常に効果的であった。 ・ ICF システムは、「活動と参加」に関しては実際の支援現場での様子を具体的に入力することで、支援員の経験年数には関係なく情報の収集ができた。「環境要因」に関しては、家族からの情報も必要なので時間がかかった。 ・ 様々な課題となる行動があるなかで特にターゲットとなる行動を決め、それに絞って時間帯や頻度の記録を付けることにより得られるデータは、その行動に対する支援を考えるにあたって重要な情報となるうえ、記録をつける負担も少なかった。 ・ 行動記録を取るという視点では非常に効果があった。視覚化のしやすさ、現場で記録が取れるので抜群に良かった。 ・ 課題がピックアップされたため、どういった記録が必要か収集する目的ができたため周知がしやすかった。 ・ 複数の機器から入力できるともっと記録の精度が上がるのではないかと。 ・ 数名の利用者には家族や周辺の方に情報を聞く機会が増えた。スタッフ数名にその意識が芽生えた。 ・ 今回記録をとるためのアプリはiPadで行ったため、一度紙ベースで記録をとってからアプリに打ち込んだ。電子機器の関係で携帯してその都度打ち込むことができなかつたため、少し手間であると感じた。 ・ 端末を使用することで手軽に入力することができ、記録の精度が上がったのではないと思う。 ・ ICT を活用することで、記録の収集やまとめる時間は短縮された。ICT を導入した記録入力が定着化すれば、業務効率は上がると思う。
どちらともいえない
<ul style="list-style-type: none"> ・ 記録の仕方に関しては、慣れやデジタル入力での得意不得意もあるので一概には言えない。 ・ 行動の記録は行いやすかつたが、その行動が起きるきっかけとしてのできごとや理由を記載できればよかった。 ・ 記録の収集に関しては取りやすいと感じたが、その記録から何か支援策、具体策へのヒントがでてくるとよいと感じた。

- ・ ICT を活用することで手軽に入力ができ、記録の精度が上がった

課題

- ・ ICT を使用した記録に対して、支援者によって慣れや得意不得意がある（表 8）

Q4. 関係者間での利用者情報や支援に関する情報共有が行いやすくなったかどうかについて教えてください

評価点（図 4）

- ・ 「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答は 13 名で、全体の 52.0%であった

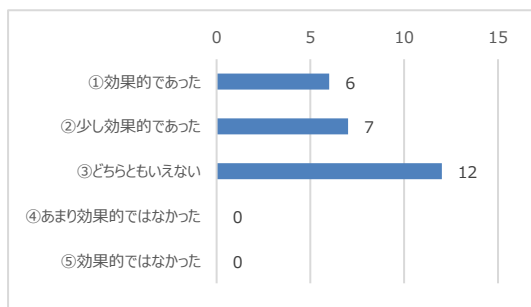


図 4 回答結果（Q4 評価点） (n=25)

効果

- ・ 利用者の状況がデータ化されることで保護者や医師、栄養士など他職種との情報共有が行いやすくなった
- ・ ICT ツールを使うことで記録の取り方が標準化され、記録の分析結果がグラフによって視覚化されるので理解しやすかった

課題

- ・ 調査期間で他機関と情報共有する機会がなかった（表 9）

表 9 回答結果（Q4 記述）

効果的であった・少し効果的であった
・ データ化されることによって行動が起きるタイミングやどの期間に集中しているか等を医師や保護者との情報共有が行いやすくなった。
・ ICF システムのように基準となる書式があると利用者情報が整理できる。
・ ICT ツールを使うことで、記録の取り方が標準化され、記録の分析結果がグラフによって視覚化されるので理解しやすかった。
・ 今回は生活介護事業所と行動援護事業所の 2 か所のみで協働したが、事業所数が増えた場合、ICF システムの作成や支援者会議の持ち方もさらに時間と会議の持ち方に技術が必要になると思う。
・ 記録等は保管場所を決め、いつでも確認できるようにした。また、定期的に話し合いを持ち情報共有、また支援方法の見直しを行なった。
・ 今回の試行では他職種との連携はなかったが、ターゲットとする行動の内容によっては、医師、看護師や栄養士等と連携の必要がある場合も考えられ、その際には情報共有しやすくなるものと思われる。
どちらともいえない
・ 当事業所内の支援員間での情報収集に留まっていた。教育や医療、他事業所、保護者との情報共有への活用までは至っていない。
・ ICF システムが共通のツールとして活用できれば、情報共有がスムーズにできるのではないかと期待できる。
・ 今回の取り組みの中ではその他の関係者（看護師、医師、管理者）とは連携しておらず効果は不明。

Q5. 記録に係る負担感の軽減が図れたかどうかについて教えてください

評価点（図 5）

- ・ 「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答は 12 名で、全体の 48.0%であった

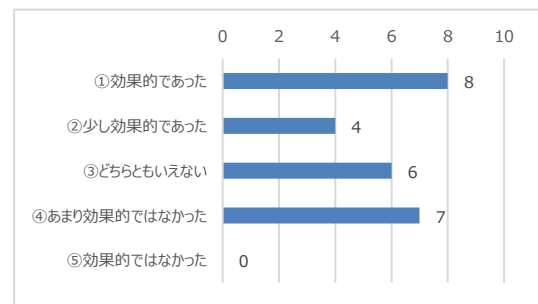


図 5 回答結果（Q5 評価点） (n=25)

効果

- ・ ICT を活用することで記録にかかる負担感の軽減に一定の効果はあった

課題

- ・ ICF システムの記録は項目数の多さや内容の難しさがああり、通常業務に加えて取り組む場

合は負担感がある

- ICT ツール (Observations) の記録を手軽にネット上で共有できればよい (表 10)

表 10 回答結果 (Q5 記述)

効果的であった・少し効果的であった
<ul style="list-style-type: none"> 記録に係る負担感の軽減に一定の効果はあったと思われる。 日常の行動記録をこの行動記録システムのみに変更することはできないため、日常の行動記録の負担が軽減するかどうかという意味では軽減はしない。ただし、応用行動分析を実施する際に、スキッタープロットを紙で記録してそこからエクセルに落とし、グラフ化することと対比すると、タップするだけで記録でき、グラフ化・分析もすぐに行えることは大いに負担の軽減につながると思う。 端末の操作に慣れてしまえば記録をとる労力はかなり低くなった。 これまでスキッタープロットを紙でとっていたので、タブレットで入力でき、さらに分析できたのはとても効率的であった。 observations 等の利用はタブレットを使用し、タップで回数をカウントしていく簡単なやり方だったため記録の手間が軽減でき好評であった。 現在、ペーパーで記録をとっているが、observations 2 は特に支援員からの評価が良かった。 すべてのソフトなどが連携できるようなシステムがあると、より負担軽減が図れると感じた。 端末で記録をとることはとても有効と感じた。年齢層にも依ってしまうかもしれないが、今後も使用したい。
どちらともいえない
<ul style="list-style-type: none"> タブレットでの記録については軽減になると感じるが、電子機器が苦手な職員にとっては負担感が増しているように感じた。
あまり効果的ではなかった・効果的ではなかった
<ul style="list-style-type: none"> ICF システムの記録については項目数が多いこと、問われている内容の表現に難しさがあることなどにより負担感としては大きく感じた。今回は、法人内の通常業務に加えての記録でもあることも大きかった。 アプリケーションを導入した端末でしか記録が反映されないため、インターネットを媒介にしてネット上で共有できるなど改善があれば軽減につながると思った。 既存のデータがあるうえで、今回のデータで業務量は多くなったと感じた。しかし共有できるシートという強みはとても感じた。一旦できてしまえばあとは見直しをすればよいだけなので、既存のシートをこちらにスライドしていくことも可能と考える。 成人の施設だが、児童からの引継ぎの際に ICF システムを活用できるととてもよいと感じた。

Q6. 支援に必要な利用者情報および記録等の分析がしやすくなったかどうかについて教えてください

評価点 (図 6)

- 「効果的であった」と「少し効果的であった」

の回答は 18 名で、全体の 72.0%であった

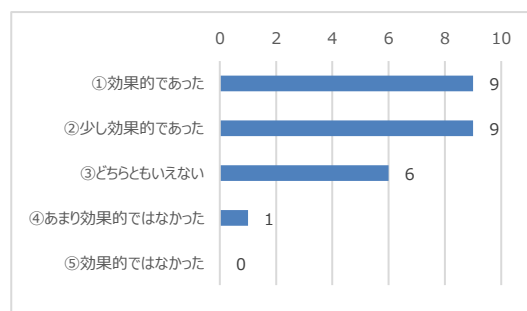


図 6 回答結果 (Q6 評価点) (n=25)

効果

- 入力した記録が自動的にグラフ化されることで、利便性が高く分析もしやすくなった
- ICF システムは強みや支援の継続、修正などに分析できるため、どの部分にスポットをあてて考えればよいか分かりやすかった

課題

- 行動の生起率などはわかりやすくなるが、行

表 11 回答結果 (Q6 記述)

効果的であった・少し効果的であった
<ul style="list-style-type: none"> グラフになるので見てもらいやすく時間帯などしっかり分析できた。細かい時間の指定や他の項目も一緒にグラフ化できるとよい。 自動的にグラフ化されることで、客観的に行動を分析することができた。 紙で書くと字のきれいさや丁寧さなど個々にバラつきがあるが、アプリを使用することで一律で見やすかった。タグ選択や自動での集計など、利便性が高く分析もしやすかった。 項目ごとに分かれていたため、必要なものを選びやすかった。そのため、分析もしやすく、支援会議の場でもすぐに確認することができた。 分析自体は、ファイルを読み込むだけなので簡易的になった。しかし、知りたい情報が得られない場合も多い。 行動をデータ化することが容易にはなったが、共有には課題を感じる。端末データの共有ができると分析までの負担も軽減されるのではないかと。 ICF システムでは、強みや支援の継続、修正などに分析できるため、どの部分にスポットをあてて考えればよいか分かりやすかった。
どちらともいえない
<ul style="list-style-type: none"> 強度行動障害の支援経験が長いスタッフは気づきを得ていたが、新任スタッフには難しいようだった。 Observations の解析にのせたところで、折れ線グラフが混ざってしまいわかりづらい点があった。 分析はデータの変換が手間だった。グラフも見やすさをあまり感じなかった。
あまり効果的ではなかった・効果的ではなかった
<ul style="list-style-type: none"> 行動の生起率は見えてわかりやすいが、行動に対する前後の様子がわからない。

動に対する前後の様子がわからない (表 11)

Q7. 試行調査で実施した本パッケージ全体に関する評価について教えてください

評価点 (図 7)

- 「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答は 19 名で、全体の 76.0%であった

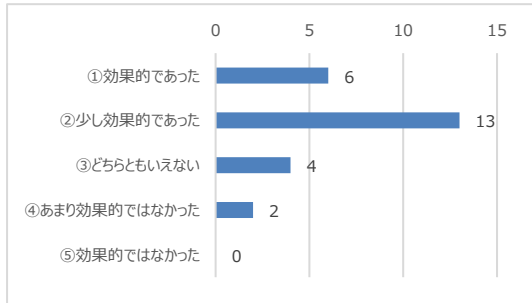


図 7 回答結果 (Q7 評価点) (n=25)

効果

- ICF システムは、障害特性や環境要因の把握に効果的であった
- ICT ツールは、記録と分析に効果的であった
- 利用者のおかれている環境や生活の質を考える、という ICF の視点に沿うことで支援の改善が望める
- パッケージを事業所内で標準化できれば情報の更新や共有、支援会議など様々な点で活用できる

課題

- 3ヶ月間の試行では不十分であった
- このパッケージを全国的に広める場合は、使いやすい手軽さがなければ普及にはつながらない (表 12)

Q8. 本パッケージの改善点等があれば教えてください (例: 実施手順、使用ツール等)

ICF について

- ICF からどのように支援手順書につなげていくかについて享受する時間 (講義や研修) が必要ではないか
- ICF シートは、項目数が多く、文字が小さくなり見にくさがあり、特に年配の支援員になると見る気がなくなってしまう
- 効果の判断基準で支援員間の差が出やすいと感じたため、目安となる基準があるとよい
- パッケージの実施手順で、ICF シートを支援会議でどう活用すればよいかがあると進めや

表 12 回答結果 (Q7 記述)

効果的であった・少し効果的であった
<ul style="list-style-type: none"> ICF システムは、障害特性や環境要因の把握に効果的であった。ICT ツールは、記録と分析に効果的であった。 細かいところでは改善して欲しい点もあったが、総合的に ICF や ICT は活用すべきだと感じた。ペーパーレス、コロナ、リモート等、時代の変革が来ているなか、働き手のモチベーション維持や業務の簡素化が絶対的に必要だと感じる。 ICT を活用した記録は大変使用しやすく支援員からも評価が良かった。 今回試行してみて支援員のスキルやモチベーションの差が大きく、このパッケージをどう入れ込むかが大きな課題だと感じた。 ICF システムは、より簡素化されるようになれば活用できると思う。また、重度の方をターゲットしても強みが現れるような分析結果になると支援も導きやすいが、強みがない=重度となると支援につなぎにくいのではないかと感じた。 事業所内でも肯定的な意見が多く、具体的なパッケージに関する否定的な意見はなかった。 ICF の観点をとらえるためのスキルも必要であると感じたため、ICF システムの記入に関する研修を実施していくことで、支援者も取り組みやすくなるのではないかと感じた。使いやすさや観点が身につくと、より効果的に活用できるのではないかと感じる。 行動の役割を分析→改善という行動学的な改善のみではなく、利用者のおかれている環境、今の生活の質を考える、という ICF の視点から考えるという点がとても素晴らしいと感じている。形がきまっており、それに沿って進めていけば支援改善が望める、というのはとても画期的だと感じる。 他施設での実践報告や、有効性のデータなどが活用できれば法人や現場に対して導入に向けて働きやすくなると感じた。
どちらともいえない
<ul style="list-style-type: none"> 3 か月での短期間の施行だったので急ぎ足な感じになってしまった。 パッケージを事業所内で標準化できれば情報の更新や共有、支援会議など様々な点で活用できることはイメージができる。今回はほぼ一人で試行錯誤していたので、施設全体の理解と協力が必要になることがよく理解できた。
あまり効果的ではなかった・効果的ではなかった
<ul style="list-style-type: none"> この期間での大きな効果は見られなかったが、ヒントや気づきは多かった。 このパッケージを全国的に広めるとなると、みんなが好んで使いたがるような手軽さがないと、普及、支援の広まり、深まりにはつながらないと感じた。

すかった

ICT (Observations) について

- Observations を同一のアプリ内で分析結果

が見られるとよい

- ・回答分析やデータを Observations のスマホアプリから一度 PC に送るなどが手間なため、手順や操作がもう少し簡素化されるとよい
- ・事業所のタブレットでは Observations の分析ができなかった
- ・Observations のデータは、HP で読み込んで分析するのではなくそのまま分析結果が出せるとよい
- ・Observations 2 の分析結果について、縦軸、横軸がもう少し細かく表示されるとよい
- ・Observations2 のデータは、日付を指定して分析できるとよい

パッケージについて

- ・活用する現場が ICT に慣れていない状態像を想定してのツールやアプリの使用が必要ではないか
- ・機器の使用法のレクチャーについてもパッケージ内に含めてはどうか
- ・PDCA 支援パッケージの紹介文をもう少しわかりやすくしたほうがよい（図も交える等）。せっかく良いパッケージなのに、研修紹介のチラシの文章からはどういうことをするのか理解するのが難しかった
- ・ICF の視点をどう支援改善につなげていくのか、事例の提示があればイメージがしやすかった

D. 考察

試行調査の結果、PDCA 支援パッケージの評価として、評価点では、「パッケージの全体評価 (Q7)」は、「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答の割合が全体の 76.0% であり、また、「利用者の全体像の把握 (Q1)」が 92.0%、「情報の収集 (Q3)」が 76.0%、「記録の分析 (Q6)」が 72.0%であった。

具体的には、

- ・ICF は対象者の障害特性や環境要因の把握に効果的であり、情報の整理がしやすくなった
- ・ICT は記録と分析に効果的であり、記録にかかる負担の軽減に効果的であった
- ・ICF、ICT を活用することで情報が視覚化され、

支援者間の共有がしやすくなった

- ・PDCA 支援パッケージによる PDCA サイクルを行うことで、支援計画や支援手順書の作成と見直しにつながった等の効果があった。

これらの結果より、強度行動障害の状態にある者への支援において PDCA 支援パッケージの活用が効果的であることが確認できた。

一方、評価点において、「情報共有 (Q4)」と「記録の負担 (Q5)」の「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答の割合が全体の 52.0%、48.0%と他の項目に比べて低かった。理由として、「今回の調査期間で他機関と情報共有する機会がなかった」、「ICF システムの記録は項目数の多さや内容の難しさがあつた」、「アプリで即時的に記録できない状況があり転記が必要であつた」、「Observations の記録を手軽に共有できるとよい」といった回答があつた。今後の課題として、強度行動障害支援における ICF システムの記入内容の検討、事業所における ICT 活用環境の整備、パッケージを活用した他機関との共有事例の試行の必要性等が考えられた。

また、「ほぼ一人で試行しており、施設全体の理解と協力が必要」、「職場内での ICT の環境整備が必要」、「ICT の理解や取り扱いで支援者間の格差が生じる」、「PDCA 支援パッケージのレクチャーのための説明や研修等があればよい」といった回答があつた。パッケージを支援現場で活用していくためには、事業所全体の取り組み、事業所内で推進していく中心人物の存在、パッケージの導入効果を含めたわかりやすい資料の必要性等が重要であると考えられた。これら課題の解決に向けて、継続的な試行と検討が必要である。

E. 結論

本研究により、全国の支援者を対象とした意見交換会を実施し、広く意見を収集したことで、強度行動障害の状態にある者の支援において、PDCA 支援パッケージが有効であることが確認

できた。ただ、PDCA 支援パッケージに関する課題も指摘されており、今後も支援現場において有効に活用するための検証と見直しに取り組んでいきたい。

【文献】

- 1) 日詰正文、岡田裕樹、内山聡至ほか：強度行動障害者支援のための ICF、ICT を活用した PDCA サイクルの運用マニュアル案作成のための研究 令和 2 年度厚生労働科学研究費補助金報告書 (2021)。
- 2) 安達潤：ICF の視点に基づく情報把握・共有システムの研究開発—知的障害・発達障害児者支援における多領域連携の実現に向けて— 発達障害研究 40 (4) : 336-351 (2018) 。
- 3) 井上雅彦, 中谷啓太, 東野正幸：行動上の問題に対する行動記録アプリケーション “Observations” の開発 行動分析学研究, 34 (1) : 78-86 (2019) 。

G. 研究発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

別添5

研究成果の刊行に関する一覧表

書籍 特になし

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の 編集者名	書 籍 名	出版社名	出版地	出版年	ページ

雑誌 特になし

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年

資 料

資料 1.

「－ICF システム&行動観察システム－行動と環境の包括的アセスメントによる環境調整支援パッケージ」実施マニュアル 【令和 3（2021）年度版】

– ICFシステム&行動観察システム –
行動と環境の包括的アセスメントによる環境調整
支援パッケージ

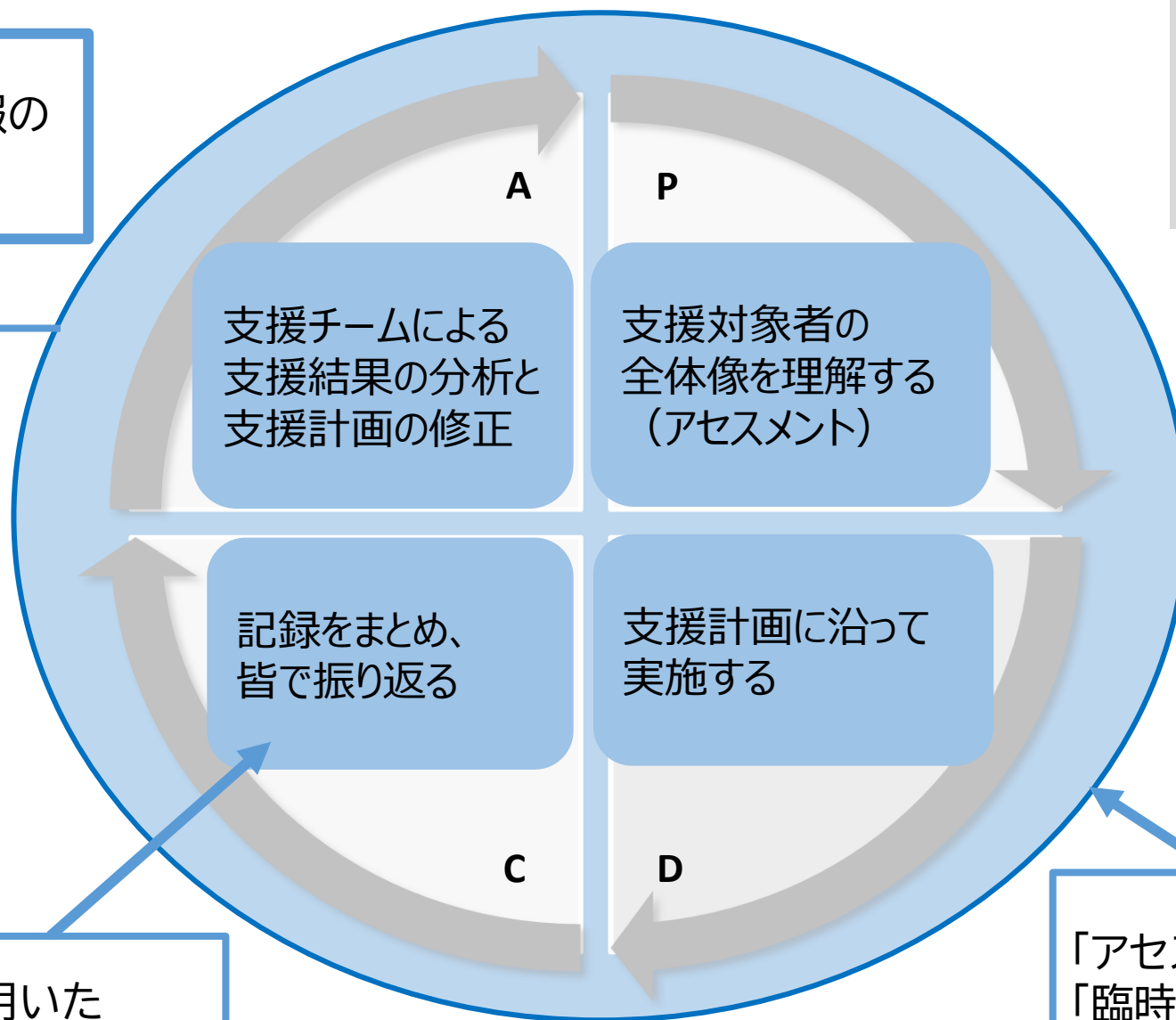
【実施マニュアル 令和3（2021）年度版】

独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園
令和4（2022）年3月

パッケージ(PDCAサイクル)のイメージ

ICFを用いた情報の
収集と整理

Plan = 計画を立てる
Do = 実施する
Check = 振り返る
Action = ニーズを分析する



Observationsを用いた
情報の共有と分析、支援効果の
評価

「アセスメント」「日常の記録」
「臨時の記録」の必要な項目を
確認するための「自己点検
チェックリスト」の活用

支援パッケージの流れ

内容	使用するツールなど
① ICFシステムへ記入し、全体像の把握	● ICFシステム
② 行動記録表を記入し、課題となる行動を選定する	● Observations Sheet
③ 記録の確認	● Observations分析HP
④ 課題となる行動のベースラインの記録	● Observations2
⑤ 記録の確認	● Observations分析HP
⑥ 支援会議の実施 冰山モデルシートで行動の背景を整理する	● 冰山モデルシート
⑦ 支援手順書の作成	● 支援手順書（事業所のもの）
⑧ 支援の実施 行動の記録	● Observations2
⑨ 記録の分析	● Observations分析HP
⑩ ICFシステムを見直し、支援前後の全体像の比較	● ICFシステム
⑪ 支援手順書の修正 ※⑧支援の実施へ戻り、サイクルを繰り返す	● 支援手順書（事業所のもの）

① ICFシステムへ記入し、全体像を把握する

- 使用するもの：ICF情報把握・共有システム（以下、「ICFシステム」）
- 取り組んでいただきたいこと：ICFシステムを使用し、利用者の全体像を把握し、情報を整理する。

（1）ICFシステムの「情報把握シート」（Excel）を作成する

ICFコアセット 活動と参加 17歳以上 情報把握シート 第1章

「活動と参加」シート 3つの質問 記入のしかた

①支援なしの場面では	<input type="checkbox"/> 困難あり	<input type="checkbox"/> 困難なし	<input type="checkbox"/> 詳細不明・非該当
質問1では、支援なしの場面で少しでも困難があれば「困難あり」を選択して下さい。「困難なし」は、項目が示す内容を、支援なしでも自力で達成できる場合に選択して下さい。			
②いま支援があるかどうか	<input type="checkbox"/> 支援あり	<input type="checkbox"/> 支援なし	<input type="checkbox"/> スキップ
質問2は、質問1で「困難あり」を選択した場合に回答可能となり、それ以外では「スキップ」が自動的に選択されます。支援のあり・なしについては、なにか少しでも支援をしていれば「支援あり」を、何もしていなければ「支援なし」を選択して下さい。			
③支援の効果は	<input type="checkbox"/> 大きい	<input type="checkbox"/> 小さい	<input type="checkbox"/> スキップ
質問3は、質問2で「支援あり」を選択した場合に回答可能となり、それ以外では「スキップ」が自動的に選択されます。支援の効果については、困難さの軽減が見られており支援の継続あるいは微調整でよい場合には「大きい」を選択して下さい。困難さの軽減が見られなかったり少しだけだったため、今後の支援効果の見極めあるいは支援の修正が必要である場合には「小さい」を選択して下さい。			

※情報把握シート「環境因子」

ICFコアセット 環境因子 17歳以上 情報把握シート 第1章

第1章 製品と用具

1.2. 食べ物や飲み物、薬や栄養補助剤

項目番号	項目タイトルと環境因子の影響を把握する視点	把握状況	フィック	補足情報（当該項目の環境因子の具体例と具体的影響）
e110a	食べ物や飲み物	把握状況	○	①悪影響・生活低下の食品とその状態：納豆が苦手。納豆が出ると給食を投げてしまい食事が摂れない。水分摂取量に限りがなく、水道水を飲み過ぎて嘔吐する ②好影響・生活上の食品とその状態：会食会 ③その他：納豆は、代替品で対応している。入浴後は嘔吐しやすいため、入浴前の服薬や食事提供は避けている
	生活の低下につながる悪影響をもたらすもの	あり		
e110b	薬や栄養補助剤	把握状況	○	①悪影響となる薬とその状態： 職員のとの関わりを求めるために自傷行為を行い、塗り薬を要求する ②好影響となる薬とその状態：早朝覚醒があるため、服薬の薬内容を変更し、睡眠の導入を促す物から持続する物に変更 ③その他：薬を塗る時間を決めることで、薬へのこだわりが減った。睡眠リズムが整い、昼夜逆転がなくなった。
	健康度低下や生活の崩れ・依存につながる薬やサプリメントの悪影響	あり		
	健康度向上とよい生活の維持につながる薬やサプリメントの好影響	あり		

1.3. 個人が日常生活や遊びで使う製品と用具

項目番号	項目タイトルと環境因子の影響を把握する視点	把握状況	フィック	補足情報（当該項目の環境因子の具体例と具体的影響）
e1150	日常生活で使う一般的な製品と用具（改造や特別な設計なし）	把握状況	○	①不快・使いにくい日用品と生活しづらさ：家電製品全般。興味はあるが、使用方法がわからず破壊行為に至ってしまう。特に扇風機へのこだわりが強い ②快適・使いやすい日用品と生活しやすさ：CDラジカセ。クラシック音楽を聴いているときは落ち着いていることが多い。 ③その他：扇風機を見ると壊してしまうため、扇風機を撤去し、エアコンでの生活に変更。エアコンのルーバーは外している
	使用時の不快さや使いにくさで生活のしづらさをもたらす日用品	あり		
e1151	日常生活での使いやすさを支援するために工夫・改造された製品と用具	把握状況	○	①不快・使いづらい支援用品と役立たなさ：トイレ後方に座るため便座を常に汚すことが見られる。背もたれにクッション材を設置したが、体制の変更と排尿時の失敗が増えた ②快適・使いやすい支援用品と役立つ方： ③その他：クッション材は撤去する
	使用時の不快さや使いづらさで生活に役立つ支援用の日用品	なし		
e11520	一般的な遊び用の製品と用具（改造や特別な設計なし）	把握状況	○	①不快・使いづらい遊び用品と妨げる状態：車の雑誌は好きだが、刺激が強く、外出の要求が増える。自分要求が通らないことで不安定になる。他の利用者に雑誌を破られてしまう

第1章 学習と知識の応用

1. 目的をもって（わかって、知ろうとして）五感（視・聴・嗅・味・触）を使うこと。

項目番号	項目タイトル	支援なしで	いま支援は	支援効果は	フィック	補
d110	目的をもって見る	困難あり	支援なし	スキップ	○	①味
d115	目的をもって聞く	困難あり	支援あり	大きい	○	①と ②③
d120	目的をもって触る・嗅ぐ・味わう	困難あり	支援あり	大きい	○	① ②に ③

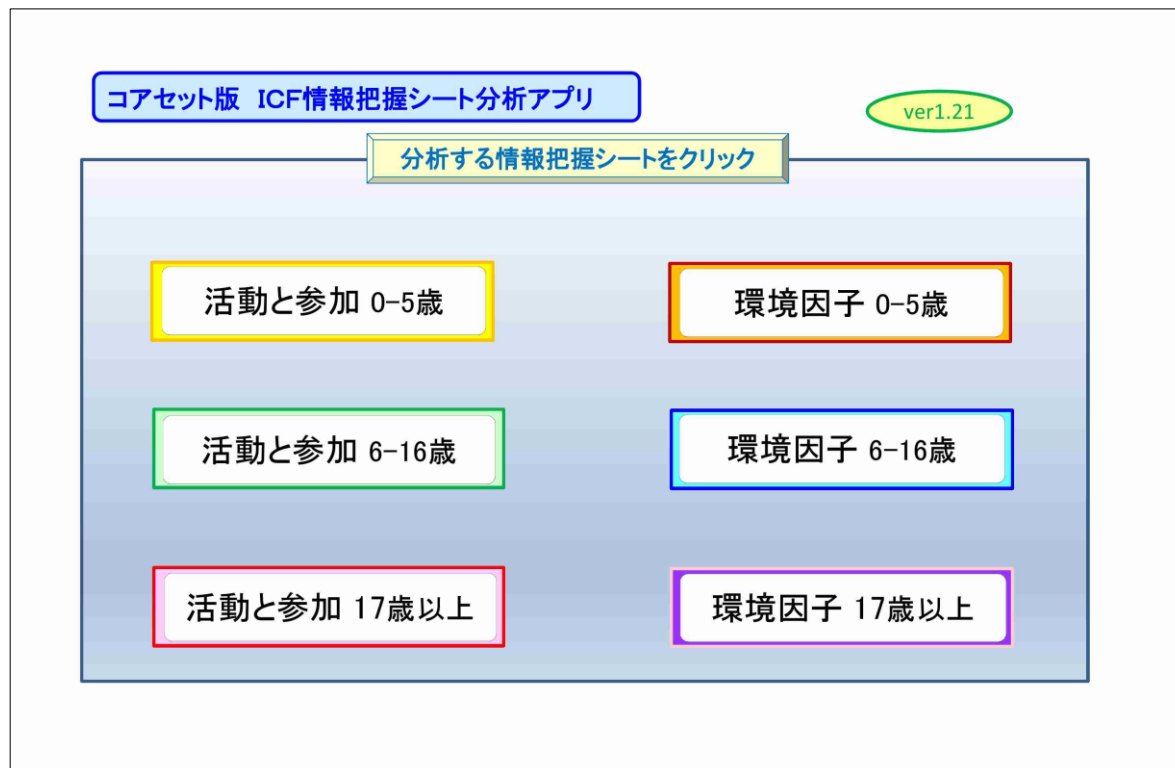
※情報把握シート「活動と参加」

- 対象となる利用者について、情報分析シートの各項目に沿って利用者の情報を記入する。
- シートのなかで、「活動と参加」、「環境因子」は必ず記入する。

【記入の際の留意事項】

- 推測ではなく、事実をとらえるためのシートという観点で記入する。
- 回答が難しい場合は、無理に回答しなくてよい。
- 「補足情報」は利用者の状況が把握できるように、なるべく具体的に記入する。
- 「わからない」「機会がないので判断できない」項目については、「詳細不明・非該当」を選択してよい。その場合、なるべく「補足情報」の「④その他」にその理由を記載しておく。

(2) ICFシステムの「情報把握シート分析アプリ」(Excel) を使い、内容を整理する



- 「ICF情報把握シート分析アプリ」で、該当する項目（「活動と参加」「環境因子」など）をクリックする。
- 記入した情報把握シート（Excel）を選択する。

※「ICF情報把握シート分析アプリ」によって整理された「活動と参加」の項目の例

【強み（支援なしで困難なし）】

項目番号	項目タイトル	支援なしで	いま支援は	支援効果は	チェック	補足情報
d455	移動すること	困難なし	スキップ	スキップ	○	①歩行は自力で行える
d540a	衣服の着替え、履き物の脱ぎ履き	困難なし	スキップ	スキップ	○	①衣類の着替え、履き物の脱ぎはぎは一人で行うことができる

- 記入した内容によって項目ごとに
カテゴリー別に整理される。
- 項目ごとの内容を確認し、利用者
の全体像の把握や支援に必要な
視点などを整理する。

【支援の修正（支援効果小さい（なし））】

項目番号	項目タイトル	支援なしで	いま支援は	支援効果は	チェック	補足情報
d132	質問して知ろうとすること。	困難あり	支援あり	小さい	○	①本人から声出しやジェスチャーで質問をしてくるが、表現が曖昧で理解困難 ②コミュニケーションシートを活用し、指さして要求内容を確認する ③コミュニケーションシートだけでは、本人の質問・要求の意図が汲み取れないことが多い
d155	日常生活に必要な行為やスキルの習得	困難あり	支援あり	小さい	○	①物の扱いの加減ができない ②自助具の活用 ③こだわりが強く、一度獲得した方法を変更することが困難
d160	何かに注意を集中すること	困難あり	支援あり	小さい	○	①活動中に何度もトイレに行く ②タイマーを活用したり、活動終了後に本人の好きなものを取り入れることで仕事に集中できるようにする ③活動時間に変化はない
d161	課題や作業が終わるまで注意を逸らさないこと	困難あり	支援あり	小さい	○	①活動中に何度もトイレに行く・課題を壊す ②本人の興味関心のある課題内容に変更する ③初めは活動に集中できるが、途中から課題を壊し始める
d166	読むことの実生活での活用	困難あり	支援あり	小さい	○	①好きな車雑誌を見ることは好きであるが、文字を読むことはできない ②本人の好きな車の雑誌を定期的に提供する ③車の雑誌を見ることで外出の要求が多くなる

② 行動記録表を記入し、課題となる行動を選定する

- 使用するもの：Observations Sheet（スマホアプリ）
- 取り組んでいただきたいこと：1週間の行動を記録し、課題となる行動を選定する

※課題となる行動は複数選択してもよい。



(1) 記録表を作成し、名前を入力する

- ・対象となる利用者の名前を入力する。
- ※名前は受講番号で記入する。



(2) 行動を記録する日を選択する

- ・「記録表一覧」画面で、対象となる利用者を選択する。
- ・行動を記録する日を選択し、右下の+ボタンをタップする。



(3) 行動を記録する

- 項目に沿って記録する。
- 項目は、「行動」「時間帯」「場所」「状況（人）」「状況（行動）」「対応」「推定される機能」
 ※一度記入したものはタグマークをタップすることで選択することが可能。

(4) 1週間分の行動を記録する

- 対象期間とする1週間分の行動を記録する。

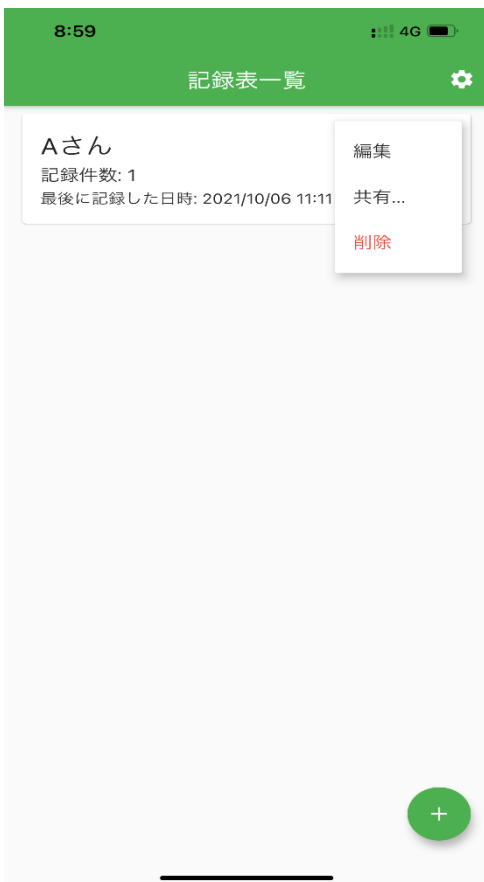


※記入例

③ 記録を確認する

- 使用するもの：Observationsの分析用HP
- (URL : <https://observationsanalysis.web.app/>)
- 取り組んでいただきたいこと：

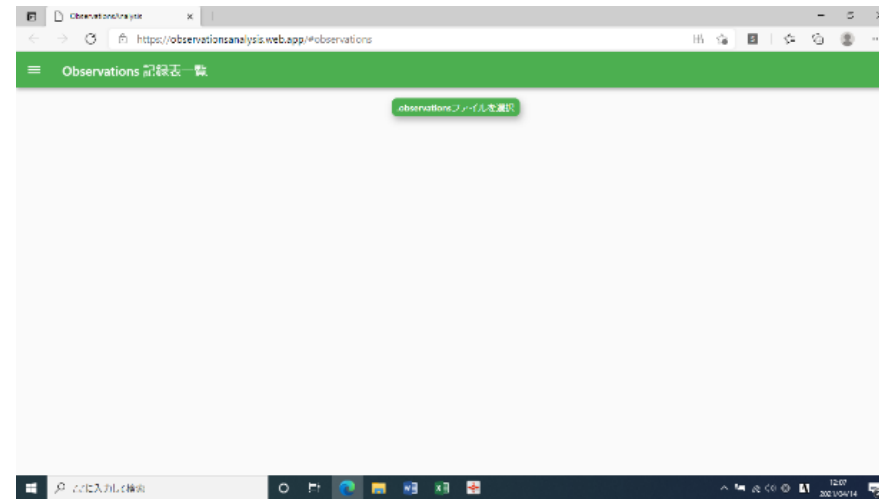
(1) アプリの記録をPCに送る



これまでアプリ
(Observations Sheet、
Observations 2) で
取った記録を、各記録
の画面右上のメニュー
から「共有」を選択し、
データをメールでPCへ
送信する。

(2) 分析用HPにデータをアップロードする

Observations分析用HPを開き、左上のメニューボタ
ンから該当するアプリを選択し、記録のデータをアップ
ロードする。



(3) アップロードしたデータを確認する

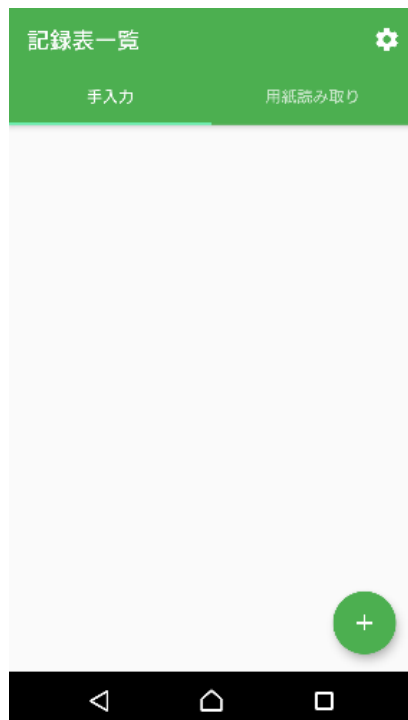
Aさんの記録一覧

番号	記録日時	先行事象	行動	後続事象
1	2021/05/23 10:57	時間帯: 2021/05/23 10:57 場所: 居室～廊下 状況(人): 職員 状況(行動): 起床～朝食時は言葉遊びをしている。朝食後「やさしいジュースください」カードを忘れていたため促し、本人すぐに取りに帰る。帰室後、居室から走り出て職員に手を上げて向かう。	大不穩(掴みかかり、号泣、ハンカチ破り)	対応: 興奮状態になっており、メモ提示するもなかなか入らず、職員に掴みかかること繰り返す。 「①おへや②すわる③おちつく④やさしいジュース」のメモ提示で少し切り替わり、手洗いセット要求。その後も走り出て職員に向かうことが11:00頃まで続き、都度メモ提示を行う。本人スケジュールを組み立てたり、「しんこきゅう!」と言いつつハースーハーと息をしたりする。ソファを倒して横になり、徐々にトーンダウンする) 推論される機能:

分析用HPで
アップロード
したデータ
はcsv形式
でダウン
ロードが可
能。

④ 課題となる行動のベースラインを記録する

- 使用するもの：Observations 2（スマホアプリ）
- 取り組んでいただきたいこと：行動の頻度や時間帯などを継続して記録する。
- ※記録を取る行動は、複数でも可。



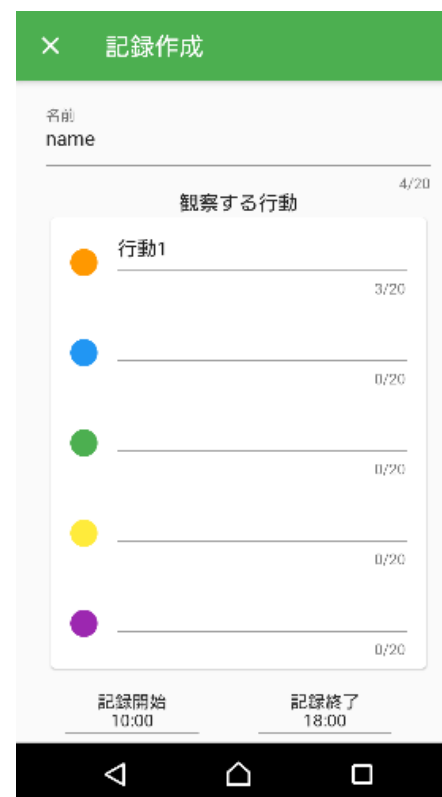
（１）名前を入力する

対象となる利用者の名前を入力する。
※名前は受講番号で記入する。

※記入例

（２）記録する行動を入力する

- 作業②で選択した行動を入力する。
- 入力は、「記録する行動」
- 記録する時間について「記録開始（時間）」「記録終了（時間）」「記録間隔」を設定する。



← Aさん					
< 2021/04/21 >					
時間	頬をたたく	服を破る	水へのこだわり	大声	未観察
10:00	0	0	0	0	<input checked="" type="checkbox"/>
10:30	2	0	0	0	<input type="checkbox"/>
11:00	5	0	1	3	<input type="checkbox"/>
11:30	0	0	0	1	<input type="checkbox"/>
12:00	2	0	1	3	<input type="checkbox"/>
12:30	1	0	0	1	<input type="checkbox"/>
13:00	0	0	0	0	<input type="checkbox"/>
13:30	0	0	0	0	<input type="checkbox"/>
14:00	1	0	0	2	<input type="checkbox"/>

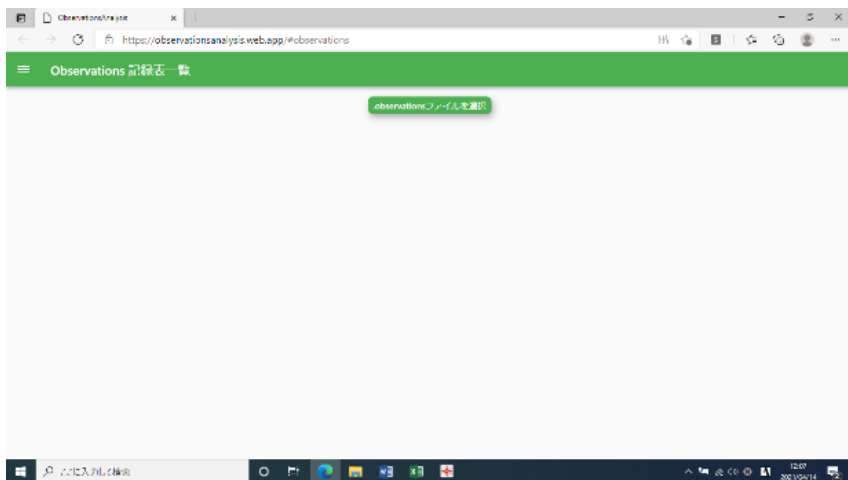
(3) 行動の頻度を記録する

- 記録する日を選択する。
 - 時間帯ごとに行動の回数を記録する。
- ※時間帯ごとの行動の項目をタップすることで記録される。
 (タップした回数が増えていく)
- ※修正する場合は右上のメニューボタンから修正を行うことが可能。

(4) 行動の傾向を確認する

「測定時間における行動生起率」を確認する。





(5) 行動の記録を積み重ねる

毎日2週間続けて記録をとる。

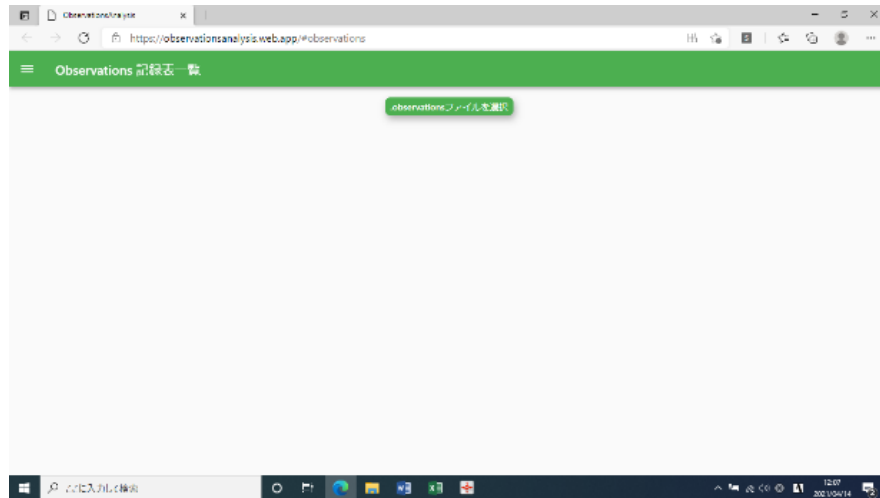
⑤ 記録を確認する

- 使用するもの：Observationsの分析用HP
- (URL：<https://observationsanalysis.web.app/>)
- 取り組んでいただきたいこと：

(1) アプリの記録をPCに送る

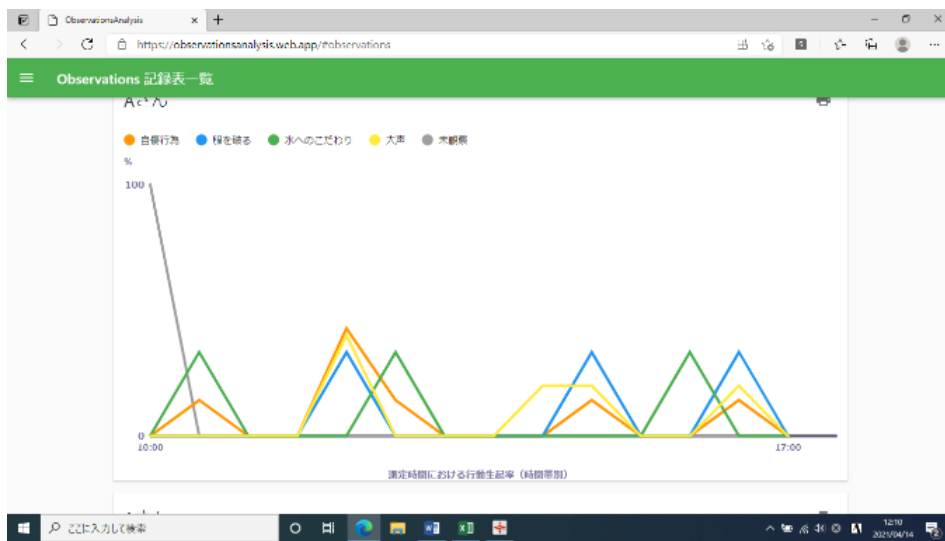
これまでアプリ (Observations 2) で取った記録を、各記録の画面右上のメニューから「共有」を選択し、データをメールでPCへ送信する。





(2) 分析用HPにデータをアップロードする

Observations分析用HPを開き、左上のメニューボタンから該当するアプリを選択し、記録のデータをアップロードする。

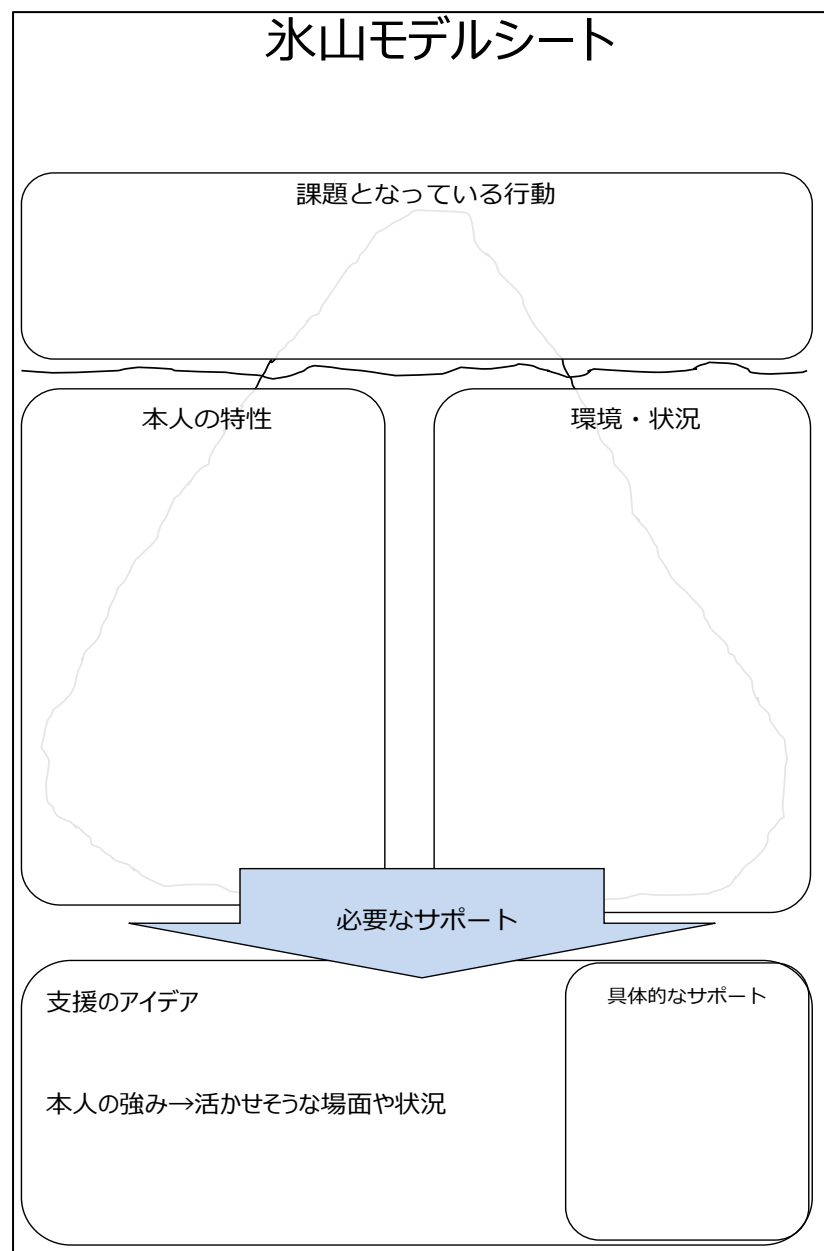


(3) アップロードしたデータを確認し、分析を行う

分析用HPでアップロードしたデータを活用し、分析を行う。

⑥ 支援会議を実施し、冰山モデルシートで行動の背景を整理する

- 使用するもの：冰山モデルシート
- 取り組んでいただきたいこと：ICF（作業①）と記録（作業②④）等をもとに支援会議を行い、課題となっている行動の背景を整理する



(1) 「冰山モデルシート」に落とし込む

- 課題となっている行動について、冰山モデルの項目に沿って背景要因を分析する。
- 分析した内容をシートに入力する。
※項目は、「課題となっている行動」「本人の特性」「環境・状況」
- 必要なサポートを検討し、入力する。
※項目は、「支援のアイデア」「本人の強み→活かせるような場面や状況」「具体的なサポート」
- 作業②④で複数の行動の記録を取った場合は、それぞれの行動に対して冰山モデルシートに落とし込む。

⑦ 支援手順書を作成する

- 使用するもの：支援手順書（事業所で使用しているもの）
- 取り組んでいただきたいこと：ICF（作業①）と記録（作業②④）、冰山モデル（作業⑥）を踏まえて、必要な支援を検討し、支援手順書を作成する。

⑧ 支援の実施および行動の記録をおこなう

- 使用するもの：Observations 2（スマホアプリ）
- 取り組んでいただきたいこと：作業⑦で作成した「支援手順書」を基に支援を行い、作業⑥の記録を引き続き行う。

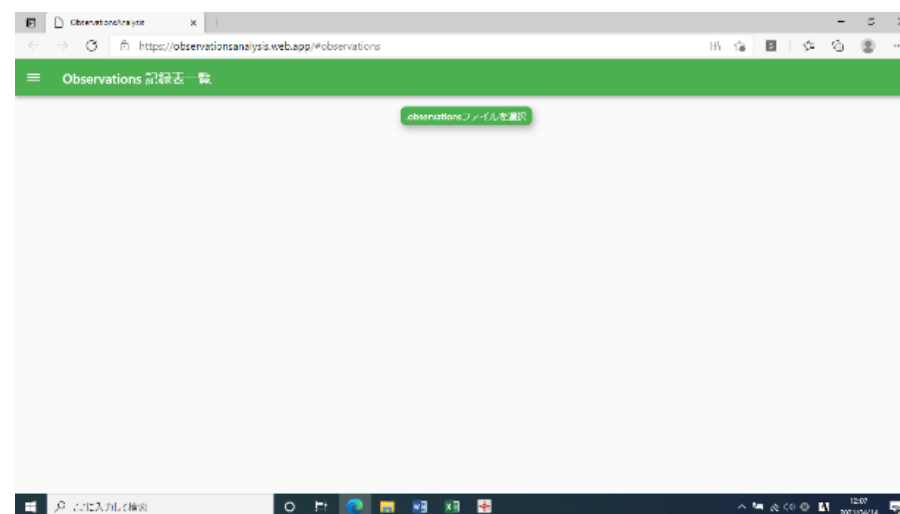
⑨ 記録を確認する

使用するもの：Observationsの分析用HP
(URL：https://observationsanalysis.web.app/)
取り組んでいただきたいこと：



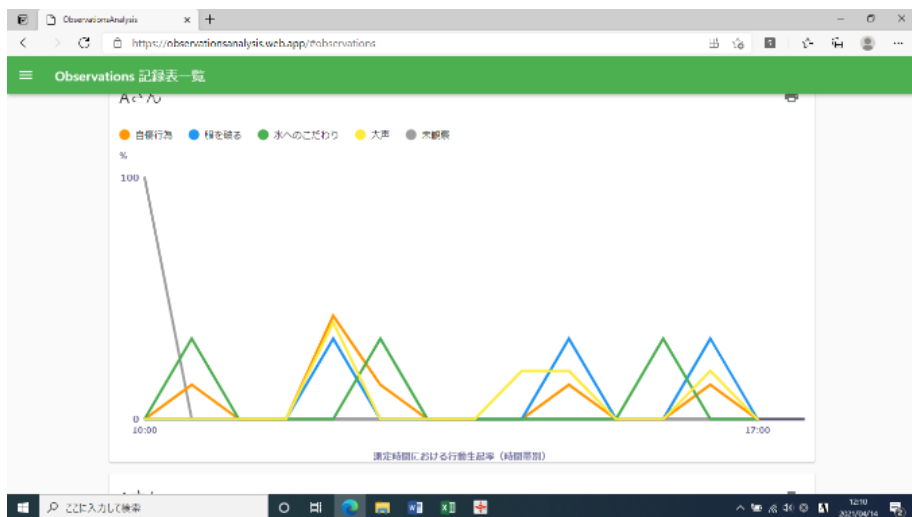
(1) アプリの記録をPCに送る

これまでアプリ（Observations 2）で取った記録を、各記録の画面右上のメニューから「共有」を選択し、データをメールでPCへ送信する。



(2) 分析用HPにデータをアップロードする

Observations分析用HPを開き、記録のデータをアップロードする。



(3) アップロードしたデータを確認する

分析用HPでアップロードしたデータを基に、支援の効果を確認する。

⑩ ICFシステムへ記入し、支援前後の全体像を比較する

使用するもの：ICFシステム

取り組んでいただきたいこと：記録の分析を踏まえ、作業①で記入したICFシステムを見直し、支援前後の全体像を比較する。

- これまでの記録の分析を踏まえて、②の作業（ICFシステムの情報分析シートの作成）を再度行う。
- 全ての項目を書き直すのではなく、変化が見られた項目等必要に応じて加筆修正を行い、見直しを行う。

⑪ 支援手順書を修正する

使用するもの：支援手順書（事業所で使用しているもの）

取り組んでいただきたいこと：これまでの作業を踏まえて、支援手順書の見直しを行う。

- 作業⑩を踏まえ、作業⑦で作成した支援手順書の内容を見直し、必要に応じて修正する。
- 作業⑧の支援の実施へ戻り、可能な限りサイクルを繰り返す。

研究者一覧

主任研究者

日詰 正文 (国立重度知的障害者総合施設のぞみの園 研究部長)

分担研究者

安達 潤 (北海道大学大学院教育学研究院 教授)

井上 雅彦 (鳥取大学医学系研究科臨床心理学講座 教授)

研究協力者

市川 宏伸 (日本発達障害ネットワーク 理事長)

松上 利男 (全日本自閉症支援者協会／社会福祉法人北摂杉の子会 理事長)

志賀 利一 (全日本自閉症支援者協会／横浜やまびこの里相談支援事業部 部長)

會田 千重 (独立行政法人国立病院機構肥前精神医療センター 療育指導科長)

大黒 哲史 (大阪府立砂川厚生福祉センター)

竹矢 恒 (社会福祉法人同愛会 日の出福祉園 副事業所長)

高橋亜希子 (株式会社エンカレッジ 取締役)

今出 大輔 (社会福祉法人旭川荘 おかやま発達障害者支援センター)

中谷 啓太 (鳥取大学附属病院 子どもの心の診療拠点病院推進室)

成田 秀幸 (国立重度知的障害者総合施設のぞみの園 診療部長)

伊豆山澄男 (国立重度知的障害者総合施設のぞみの園 生活支援部)

村岡 美幸 (国立重度知的障害者総合施設のぞみの園 研究係)

高橋 理恵 (国立重度知的障害者総合施設のぞみの園 研究係)

熊岡 正悟 (国立重度知的障害者総合施設のぞみの園 研究員)

内山 聡至 (国立重度知的障害者総合施設のぞみの園 研究係)

岡田 裕樹 (国立重度知的障害者総合施設のぞみの園 研究員)

厚生労働科学研究費補助金
障害者政策総合研究事業（身体・知的等障害分野）

**強度行動障害者支援に関する効果的な情報収集と関係者による
情報共有、支援効果の評価方法の開発のための研究**

令和3年度総括・分担研究報告書

2022年5月

研究代表者 日詰 正文

編集・発行 独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園
〒370-0865 群馬県高崎市寺尾町 2120 番地 2
TEL 277-325-1501 FAX 027-327-7629
URL <https://www.nozomi.go.jp>